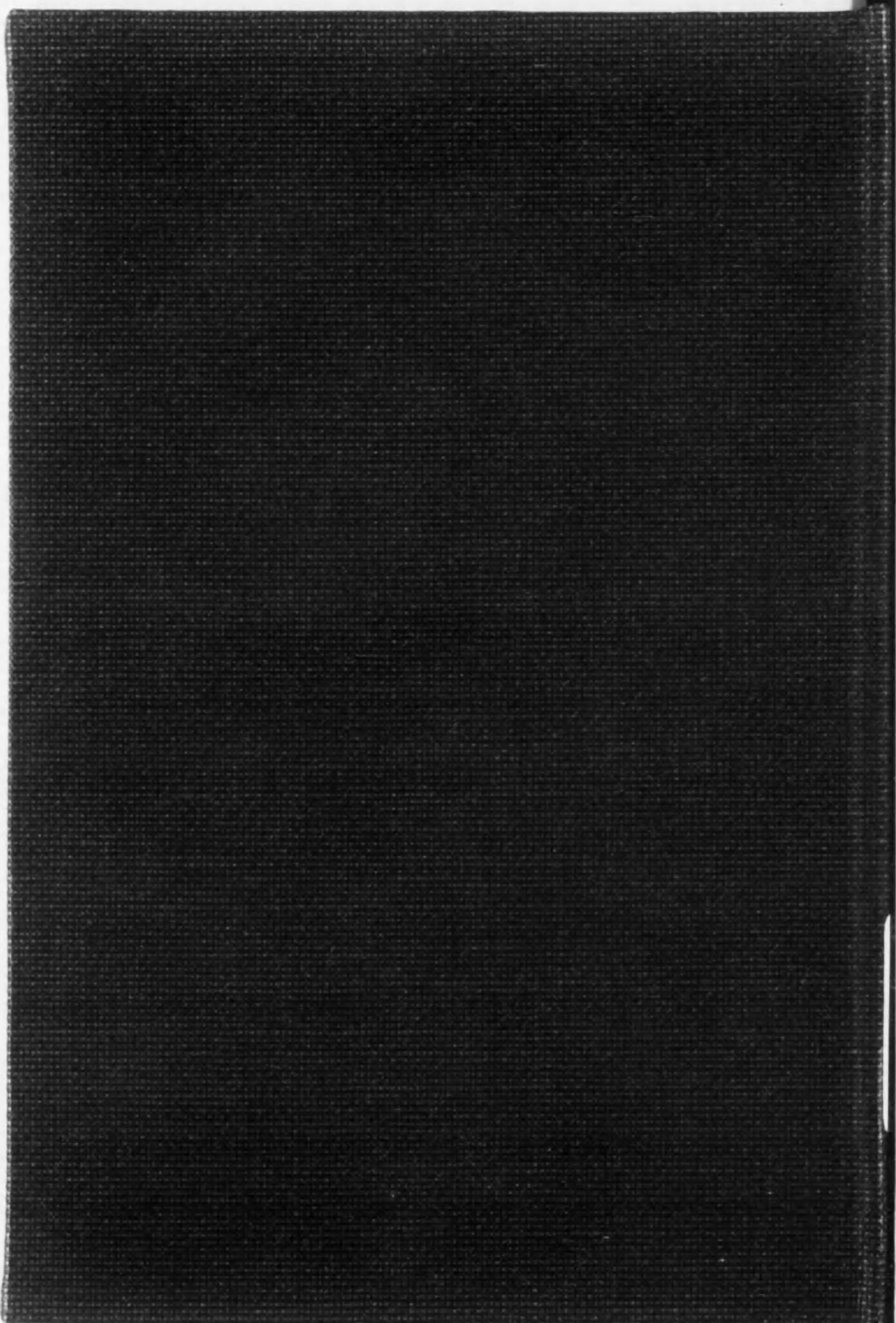
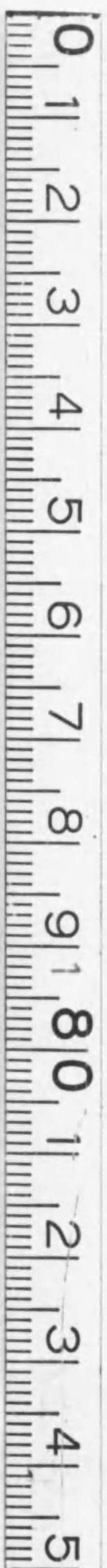


始



H-2B-22

カトリック

講話集

34

62



No. 10.11 第三期

コスボ・ンド社

特



カトリック講話集 〔第十三・十一期〕

浦川和三郎師著

聖マリアの連禱



ドン・ボスコ社發行

聖マリアの連禱(三)目次

前日	我等が喜悅の源(其一)	一
第一日	我等が喜悅の源(其二)	八
第二日	靈妙なる器(其一)	一七
第三日	靈妙なる器(其二)	二四
第四日	靈妙なる器(其三)	三二
第五日	崇むべき器(其一)	四〇
第六日	崇むべき器(其二)	五〇
第七日	信心の優れたる器(其一)	六一
第八日	信心の優れたる器(其二)	六八

第九日	奇しき薔薇の花(其一)	七八
第十日	奇しき薔薇の花(其二)	八六
第十一日	ダヴィドの塔(其一)	九四
第十二日	ダヴィドの塔(其二)	一〇五
第十三日	象牙の塔(其一)	一一四
第十四日	象牙の塔(其二)	一二四
第十五日	黄金の堂(其一)	一三一
第十六日	黄金の堂(其二)	一四〇
第十七日	契約の櫃(其一)	一四八
第十八日	契約の櫃(其二)	一五五
第十九日	契約の櫃(其三)	一六三
第二十日	契約の櫃(其四)	一七三

第二十一日	天の門(其一)	一八二
第二十二日	天の門(其二)	一九〇
第二十三日	曉の星(其一)	一九九
第二十四日	曉の星(其二)	二〇七
第二十五日	曉の星(其三)	二一六
第二十六日	病人の回復(其一)	二二五
第二十七日	病人の回復(其二)	二三四
第二十八日	罪人の依托(其一)	二四三
第二十九日	罪人の依托(其二)	二五〇
第三十日	憂き人の慰藉(其一)	二六一
第三十一日	憂き人の慰藉(其二)	二七三



聖の連禱 (三)

前日 我等が喜悅の源 (其一)

漲り、言ひ知れぬ喜悅に躍り立つものである。今聖母は上智の座に在し、神の御子、永遠の智なるイエズスまでが、之に住居を定め給うた位で、爲に樂しい平和を覚え、天の喜悅、地の喜悅となり給うた。神を喜ばせ奉り、併せて天使と人類をも樂ませ給うたのである。

實に聖母は神の喜悅である——或日聖母はビルディッタ聖女に御顯れになつた。見れば御子が人類の罪を甚く怒らせ給ふので、連りに祈念を凝し、嘆願を

重ね、その御怒を和げ奉るべく努めて居られる。すると御子も終に曲げて聖母の願を聞き容れ、「御身は天使、聖人等の光榮であり、元后であつて神様までが御身によつて慰められ給ふのです」と仰せられた。

實に神はこの世を見渡し、御手に造られし人類の中に、清淨で、正義で、無罪で、美しい徳の光を輝かして、始終御自分を思ひ、一心に御自分を愛し、何時になつても、御自分に離れることない人を捜し給うた。然し世に見えるものは道徳の腐敗ばかり、罪惡の汚點ばかりであつた。「彼等は腐敗したり、善を爲すものなし、一人だになし」(詩一三ノ三)とダウイドも歌つて居る通りで、ノエの時には流石の神も人間を造つたのを後悔して、一應は洪水を以て之を滅し給うたが、然しノエの子孫も聽て前々通りになつて了つた。

神は人に自由を興へ、夫れに由つて自ら進んで惡を避け、善を行はしめようとして下さつた。それに人は皆その自由を惡用し、其自由に由つて善を爲さう

とはしないで、倒に惡を行つた。眼を開いて我と我身の上を眺めて見よ。少しでも我身の平生に注意し、我身の習癖を覗いて見たらば、主に忝うせし自由を如何に惡用して居るか、幾れほどの罪を、幾れほどの惡き望を、幾れほどの危い機會を避けようとはせず、否、自分から捜し求めて居るか、何かの試嘗に遭ひ、何かの事情に遭すると、夫れを幸ひに、信仰上の勤を怠り、主に離れ、道徳を破り、罪惡の中に轉げ込んで居ると云ふ様な壺梅ではないか。

この状態を御覽になつた神は、如何なる御心持を覺えさせ給ふであらうか、折角、御光榮を輝かす爲に作つた人類が、斯うまで腐り果てたのを見給うては何うして御心を痛めさせ給はないだらうか……。何んな畫家でも、長い間、丹精を凝して描き上げたその美事な畫幅をば、道に投げ棄てられ、泥の中に踏み付けられては、悲憤の情に胸も破れんばかりになるではあるまいか。固より神は悲んだり、悔しがつたりし給ふことはない。何んなことがあつても、そ

の限りなき幸福を脅かされ給ふことはないのだが、さらばとて人が尊拜しても、忘却しても、愛慕しても、侮辱しても、無關心であらせ給ふはずはあるまい。

然るに斯る汚れ果てた物悲しい世界に、獨り聖母マリアだけは、寂しい冬枯の野に眞白く咲き香ふ梅の花の如く、その清い汚ない御靈魂は曙の光よりも美しく、その愛らしい御心根は天使の夫れにも優り、その神に賜はつた自由意志を自由に使ひ、平伏して神を禮拜み、身も心も全く神に献げて、専ら善を勵み、徳を積み給ふのであつた。夫れを御覽遊ばした神の御喜悅は、果して如何ばかりであつたであらう。聖母の禮拜を受け給うては、彼の忌々しい偶像崇拜を怒るの情も自ら溶け、聖母の勝れた御徳を眺め給うては、地上に漲れる罪惡の流の汚はしさを忘れて了ふかの如く覺えさせ給ひ、人の子等と共に住むのを何よりの樂として、終には聖母をその淨配と選み、聖母によつて神

と人類との縁を結び、その御子に「お母様」と呼ばしめ給うたのである。

(2) 聖母は天使等の喜悅であつた——惡天使が神に叛いて地獄へ突き落され、爲に天國には随分と空間が出来た、彼等の代りにと造られた人間を見て、天使等の喜ばれたのも束の間で、その人間は忽ち惡魔に欺されて墮落し終つた、折角神に肖つて造られ、自分等の間に加はつて、永遠無窮に樂むべき筈の人間も、醜い罪惡に汚れ果て、到底天國に取り上げられて、聖の聖なる神を仰視るに堪へなくなつて了つた。地上に降つて普く人類を見廻はす毎に、天使等は落膽して、力も無げに天國へ引返すのであつたらうかと思はれてならぬ。

然るにその汚れ果てた人類の中に、一人の非常に容姿の美しい、心の清い、セラヒン天使でも其前に出では全く光を失ふと云ふ程に徳の高い婦人が顯はれ出た。之を御母として世の救主がお生れになり、人類は墮落の淵より救ひ上げ

られた。罪の汚點は洗ひ去られた。天國に昇つて、悪天使の残し置きし空席を塞ぐものが、續々と出て來たのを見た大使等の御喜悅は誠に如何ばかりであつたらうか。殊に聖母御自身が天國へお昇りになつた時、之を己が元后として歡迎した彼等の喜悅と云つたら、夫れはく心も辭も到底及ぶ所では無かつたのである。

(3) — 聖母は聖人等の喜悅であつた。 — 天使等に祝せられ給ひし聖母は、亦聖人等にも喜ばれ給うた。大天使ガブリエルばかりが「汝は婦人の中に祝せらる」と申上げたばかりではない、またエリザベトも同じ語を用ひて聖母を讃め稱へた。ガブリエルは天上の天使一同に代つて聖母を祝し、エリザベトは地上の聖人等を代表してお慶賀を申上げたのである。我等も聖母によつて神の御心が慰められ、天使聖人等は、一方ならぬ喜悅を感じられたのを見て、深く聖母に感謝しよう。感謝すると共に、我身も聖母の如く、行を研き徳を積んで、何處

から見ても申分のない善良なキリスト信者となるやうに努めよう。さすれば亦聖母の如く大に神の御心を慰め奉り、併せて天使、聖人等をも、喜ばせ申すことが出来るに違ひないのである。

(實例) — ル、ドは世界隨一の靈地で、今日カトリック信者の中に、ル、ドの名を知らないものは恐らく一人もないであらう。そのル、ドに於て聖母の御出現を忝うしたのは、ベルナデッタと稱する貧しい田舎娘であつた。彼女はフランソア・スピルスを父とし、ルイズを母として一八四四年七月に生れたが、幼き頃より喘息に悩み、身體も虚弱なせいか、年は早や十四才になつても、普通の子供よりは小柄で、僅に十歳かそこらとしか見えないのであつた。家が貧しい爲に學校へも出ること能はず、読み書きの道も知らず、それだけ教理も分らず、まだ初聖體すら授かつて居ないのであつた。たゞ彼女は無邪氣で質朴で、清淨無垢で、ロザリオを爪繰りつゝ、聖母に祈るのを樂としたもの

である。罪も、汚もない、譬へば高山の頂に夕陽の光を直面に受けて黄金色に輝ける白雪の如く、神の御喜悅となり給へる聖母は、また同じく無知無學な田舎娘とはいへ、然し浮世の濁りを知らぬ谷間の白百合の如きベルナデツタをば、その御喜悅として、古來曾てあらざる程の大きな御恵を施し、世界を驚かすほどの奇蹟までも行ひ給うた。實に聖母の喜び給ふのは富に非ず、學識にあらず、高位高官に非ず、むしろ謙遜と清淨と無邪氣とであることは之を以ても知られるであらう。

第一日 我等が喜悅の源 (其二)

(1) — 聖母は救主の御托身に協力して、我等の喜悅の源とならせ給うた——
 人祖が罪を犯して樂園を追ひ拂はれた時ばかりは、内は良心に厳しく責め立て

られ、外は明るい、何一つ不自由の無い世界から、俄に荆棘の生えまくつた暗い世界に突き出され、もう今迄の如く神の御目にも隠れず、共に親しい話を交へることも出来ず、實に其時の失望落膽と云つたら無いのであつた。然し幸ひに神の御情を蒙り、自分等の後裔に、悪魔の頭を踏み碎くべき者の生れ出づべしとの約束を忝うしたので、彼等は夫れを頼みの綱として、心切に自ら慰めたものである。

然るにその約束されし救主の來り給ふべき時はいよ／＼近いた。原罪の汚なくやどされ、美しい聖寵の光に輝ける聖母マリアの許に、大天使ガブリエルは遣はされた、救主の御母になつて下さるか、と謹んでその意中を尋ねた。聖母が、たゞ一言承諾の旨を御答へになると、夫れで人祖の罪は贖はれ、天國の門は開かれ、罪惡の暗黒裡に迷へる人類は、救ひの光を仰ぎ得て、悪魔の奴隸より再び神の愛子となれる、悲に沈めるこの涙の谷にも、大なる喜悅が漲るや

うになる譯で、人類は固唾を飲んで、聖母の御返答如何にと竦ちわびて居るのであつた。聖母は其身が童貞であつて見れば、如何して救主の御母になられようかと思ひ、事の次第を問ひ糺し、篤と御思案になつた上で、「我は主の召使也、仰の如く我になれかし」と御承諾の旨を答へ給うた。この御答が聖母の御唇を漏れ出たと見るや、天使等は喜び歌はれた。罪に惱める人類は嬉さの餘りに小躍りした。悪魔はその滅亡の期の近いのに感付いて慄ひ戦いた。斯の如く聖母は救主の御母たるべく承諾して、我等の喜悦の源とならせ給うたのである。

(2) 次に聖母は御子を十字架の上に獻げて我等の喜悦の源とならせ給うた。「我は主の召使也、仰の如く我になれかし」とお答へになると共に、聖母は救主の御母となり、其時からして人類を救ひ上げたいと云ふ熱烈な望に御胸は燃え立ち給ふのであつた。爲に言語に絶えたる悲痛の中に最愛の御子を犠牲

に供へ、天にも地にも換へ難い御子が、鬼の如き悪黨の手に付され、思ふが儘に嘲弄けられ、打叩かれ、劈かれ、果ては見るさへ恐ろしき十字架に磔けられ、瀧なす血汐を流し盡して、痛ましき御死去を遂げさせ給ふのを面前に眺め見る悲みすら厭ひ給はぬのであつた。斯うして聖母は人類救贖の大業に手傳ひ最愛の御子を犠牲に獻げて、我等の爲に命乞ひをして下さつた、「私の愛子は思召の儘に付しますから、何うぞ其代りに一切人間にお赦しを下さいまし」と心中に叫んで、御父の御憐を祈り給うたのである。

その御蔭で救贖は全うされた。神の正義は有まつた。人類はその勘當を赦されて再び神の愛子となることが出来た。我等に取つて是れほど大きな喜悦はない譯である。第一のエワはアダムを勸めて罪を犯させ、人類を云ふにも云はれぬ不幸に陥らしめたが、第二のエワたる聖母は、第二のアダムにて在す御子に手傳つて、人類の救贖を計り、我等の喜悦の源とならせ給うたのである。

(3) 終に聖母は我等に神の聖寵を蒙らして、我等が喜悅の源とならせ給うた。聖母が忍ぶに忍ばれぬ悲痛を忍んで、最愛の御子を犠牲に供へ、その人類救贖の大事業にお手傳ひになつたのと、また御子が親しく十字架より遺言して人類をその御手に托せ給うたのと、この二つの理由によつて、神は常に總ての聖寵を聖母の御手に由つて分配し給ふのである。無論、神は聖寵の所有主である。聖母の御手を経なくとも、勝手に聖寵を人に施しも得給へば、施し給ふこともある。然し聖母によつて聖寵の源たるイエズスを我等に與へ給うたのだから、また聖母によつて各々にその聖寵を分配し給ふのも、理の當然であらう。だから聖母に頼り頼らなくては、救靈は得られない、一の聖寵も蒙れないと云ふ譯ではないが、然し聖母の手續を経てお願ひするのが、聖寵を蒙り、救靈を全うするのに最も安全な徑捷なのである。

随つて我等は聖母の御陰によつて罪を赦され、惡魔に打勝ち、誘惑を防ぎ、

聖徳に進むことが出来、夫れに由つて心は安堵し、現世でも大なる喜悅を得、未來では終なき幸福を擅にすることも出来るので、いよく以て聖母を我等が喜悅の源と崇め尊ぶこそ然るべきであらう。

(4) 聖母は我等の喜悅の源に在して、我等は聖母の御蔭で、救濟の御恵を蒙り、罪を赦され、神の愛子となり、天國の窮りなき福樂に躍り喜ぶことが出来る身の上となつたのであるから、何時も一聖母を讃め稱へ、その御情を感じ謝しなければならぬ。苟にも罪を犯して救世主の御苦みを無にし、聖母の御悲みを水の泡となし、胸は喜悅に躍る代りに、却つて良心の責に返らんばかりとならないやう、注意するが肝要である。「罪人に平安なし」とは善く言つたもので、罪人は決して平安を樂むこと出来ない。心に平安がないならば、喜悅も何もあつたものではない。幾ら好きな惡戯をやつても、いくら挑ねたり躍つたり、歌ひつ舞ひつしても、絶えず良心に怒鳴られて居ては、何の喜悅が

感じられよう。たゞ神を尊び、聖母を愛し、善を勵み、徳を積み、心に何の曇りも掛らない人こそ、眞の平安が樂める、偽りなき喜悅が味はへるのである。

あゝ我等が喜悅の源なる聖母よ、我等の爲に祈り給へ。我等に眞の喜悅を味はしめ給へ。アメン。

(實例) 第一回出現——時は一八五八年二月十一日のことである。スピルス
の家には一本の薪もなかつたので、ベルナデッタは妹のマリア、隣家のジ
ヤヌ・アバデイと三人打連れて、ル、ドの町外れはガヴ河の畔に枯枝を拾ひに
出掛けた。河の向ふにはマツサビエルと云ふ巖が缺つて居る。マリアとジヤ
ヌはさつさと木履を脱ぎ、水にはまつて向ふに渡つた。病身のベルナデッタも
暫くは躊躇したものゝ、思ひきつて跣足になり、河を渡らうと片方の靴下を
脱ぎかけて居ると、突然大嵐の様な音が聞えた。ベルナデッタは驚いて左右を
見廻したが、樹の枝は少しも動いて居ない、間違ひだつたかなと、續いて靴下を

脱いで居ると、又前の通り大嵐が聞えた。ベルナデッタは恐れて突つ起つた、
そして見るともなしに前に敬てるマツサビエルの巖、その巖の洞窟を見ると、
入口に生えた野薔薇が大風にも吹かれるが如く靡いて居る。それと同時に窟
の内部から黄色の雲が顯れ、暫くすると、一人の若い、美しい姫君、嘗てこの
界限に見たこともないほど美しい姫君が窟の入口に来て、その野薔薇の上に立
つた。してその姫君はベルナベッタを眺めて微笑み、ちやうど母親みた様に、
前へ進めと合圖をなさつた。ベルナデッタは我と我目を疑ひ、こすつたり、閉
ぢたり、開いたりして見たが、姫君はやはりその前に立つて、にこにここと微笑
んで居る。

ベルナデッタは思はずコンタスをポケットから取出して其處に跪いた、姫君
も打領いて、右の腕に掛けて居る。コンタスを指の間に持ち、ともぐくに祈る
やうに見えたが、然しベルナデッタ一人に祈らせ、コンタスの玉は繰りながら

聲は出さない、たゞ一連の終の榮誦だけは聲を合せて誦へるのであつた。

ベルナデッタはこの姫君の誰なるかを知らなかつた。然しコンタスの誦へ振りに少しく注意したならば、是が聖母マリアだと云ふことに氣が付かねばならぬはずであつた。

然らば何故聖母はベルナデッタと共にコンタスを誦へ給はぬのであつたらうか。

先づ主禱文は、天に在す御父に向つて地上より叫ぶ祈禱である。然し聖母はもう地上の人ではなく、天の幸福に漲つて在すので、何一つ願ひを上げる必要を見給はぬ。天使祝詞は御自分を讃めた詞で、之を誦へて自畫自賛をやれないことは分りきつて居る。コンタスを腕に掛けて居られたのは、單にベルナデッタを奨めて之を誦へさせる爲であつた。然し榮誦は感誦、禮拜の詞、天國に相應しい歌であるから、是だけは相共に誦へ給うたのである。

ベルナデッタがコンタスを誦へ終ると、聖母は洞窟の中へ入らせられ、黄色の雲も共に消え失せた。聖母はベルナデッタを見て微笑み、彼女の心を言ひ知れぬ喜悅に躍らしめ給うた。あゝ世の少年、少女等、心を清く保ちて、罪なく汚なく、一點の曇さへなく之を保ちて、聖母の微笑を忝うすべく務められよ。

第二日 靈妙なる器 (其一)

(1) 聖母マリアの貴い母位を讃め、その言に餘る美しい童貞を稱へた上で我等は暫く立ち止つて、正義の鏡を眺めた。すると心の不足缺點が幾個もく夫れに寫つたので全く閉口したが、成るべく其汚點を拭き取るべく力を盡した。聖母は段々と我等を導き、上智に近かして下さつた。天國の福樂を玩味ひ、世間の榮華を輕んずる上智、その上智を乞受けて、「天を仰ぎし眼に、地

は如何に醜いことよ」と叫ぶまでに至らしめ給うた。もう餘程聖母に近き、其子女に似つかはしくなり、それだけ心には言ふべからざる喜悅の情が溢れて來た。聖母は實に、我等の喜悅の源にて在すからである。

然し是で聖母に對する讚美の辭が述べ盡された譯ではない。聖母ばかりは幾ら讚め稱へても、是でもう澤山よ、と云ふ迄には至らない。因つて聖會は痛切なる譬喩を借り、美しい形容を雇ひ、舊約の顯著しい出來事に訴へ、以て是まで描きかけて來た聖母の御姿を立派に完成しようとするのである。

そこで先づ聖母を呼んで靈妙なる器と稱へる。器は何の器にせよ、人の用に供するものであるから、なるべく注意して、丈夫に、壊れないやうに作るのみならず、また其模様を選び、其線は優美に、其色彩は濃淡宜しきを得て、快感を喚起すやうにと、丹精を凝らすものである。今聖母マリアもそんな鹽梅に神が選りに選つて、美しい模様を付け、巧みな色彩を施してお作りになつた

器である。が然し其器は物質的ではなく、「靈妙なる器」、即ち何とも言はれぬ、上品な、姿の美しい、而も靈性上の器、色々の珍らしい徳の寶を満たして居る不思議な器なのである。

(2) 聖母は神を入れ奉るべき器であつた。主は聖パウロの改心をアナニアに告げて、「彼は異邦人、國王、及びイスラエルの子等の前に、我名を持行く爲に我が選みし器なり」(使徒行九ノ一五)と仰せられた。是は聖パウロが主の御教を説き弘め、その救贖の御恵を世界に蒙らしめる道具に選まれたことを意味するのであるが、この「器」と云ふ語は、最も善く聖母マリアに當て嵌まるのである。

實に聖母は九ヶ月の久しい間も、聖寵の源なる御子をおやどしになつた。其間は天國の天使等も如何に驚嘆して、聖母の周圍を取り巻き、この神の御母を尊敬し、その御胎に在す御子を伏し拜むのであつたであらうか。して裝飾に用ひる器が、何の意識も有たないのとは異り、聖母は十分に物の道理を辨へ給

ふ器、自分の重大なる使命を悟り、自分が神の御母に選ばれた有り難い御恵を悟り、自分の胎内に在す御方の誰なるかもはつきりと悟り給ふ器であつた。

是は聖母に取つて、如何に喜ばしい、忝ない御恵であつたことであらう。思ひ一たび其處に至るごとに、如何なる愛の火焰が御胸に燃え上り、心は感謝の情に躍り立つのであつたであらうか。それと共に聖母はこの前代未聞の御恵を黙想し、我身の夫れに堪へないことを認めて、深く／＼謙遜し、其器の底にまで沈み入り給はなかつたであらうか。然しそんなに謙遜して、深く隠れようと給へばし給ふほど、神の御目にはいよ／＼輝かしく照り渡り、美しく眺められ給ふのであつた。

(3) — 我等も聖體を拜領するの幸福を得た時は、聖母の如く胸中には神の御子、世の救主なるイエズスを抱くので、神の御目から見ると、燦爛した器、イエズスの御光に照り輝いた器となるのである。其時こそイエズスは我等にお遣

入り下さつて、たとへ一寸の間にもせよ、我等の心に住み、我等と一つになり御身は我等の中に、我等は御身の中に止り、我等を御身に同化させて、全く一つになつて了ふ程の有り難い御恵を施し下さるのである。で其イエズスの御心を喜ばせ奉りたいと思はゞ、彼の聖母マリアの謙遜に倣ふに若くなしである。聖母が神の御母に選ばれ給うた時、我身がさうした高い位に堪へないことを思つて、深く謙遜し給うたその美しい御心情に倣ひ、イエズスに向つて「主よ私 は主に近きたい、主に似奉り、全く一つになつて了ひたいのです。何うぞ主に不似合な點が私の内に見付かりましたら、残らず夫れを取り除けて下さいまし」と心から申上げねばならぬ。

夫から我と我胸に手を當て、靜に糺明して見よう。平生の言語、動作、立振舞の中に、主の御目障りになる様な點がないか、是非改めねばいけない、と仰しやる様な所がないか、「イエズス様、主は何をお望み遊ばすのです?、最と

善く従ふ様にですか、私は必ず然ら致します。もつと善く謹慎を守る様にですか、主を識りもせず、愛しもせぬ様な友を避けるやうにですか、屹つと然ら致しますでムいませう。もつと服装を質素にして、虚榮心を戒め、我儘を抑へるやうにですか。喜んで御約束いたします。私は是非とも御氣に召す器となりたいのです。益々聖母に似奉りたいのですから」と謹んで申上げよう。實に其時こそ我等も神を宿し奉れる靈妙なる器となつて居るのである。

(實例) 第二回出現——ベルナデッタの母ルイズは出現の話を聞いて、「それは幻覺よ、そんなことを考へるものではない、もうマツサビエルへ行つちや可けません」と娘を誡めた。然しベルナデッタは姫君の佛が始終目の前にちらついで、忘れようとして忘れること出来ず、夜中一目も眠られなかつた。日曜日になると、「洞窟へ來れ」と云ふ聲が心中に強く響いた。ベルナデッタは妹の MARIA に頼んで許可を母に願つてもらつた。母は始め斷乎として拒絶したが、

再三願はれて終に許可を與へた。ベルナデッタはその出現の姫君が萬一惡魔であつた時の用意に聖水を持ち、妹の MARIA 以下四五名の少女等と洞窟へ出掛けた。

ベルナデッタは洞窟に行き、野薔薇の眞向ひに跪き、最初姫君の顯れ給うた方を見詰めて居たが、やがて甚く感動し、喜悅に聲さへ震はせつゝ、

「あれ、其處にいらつしやる……其處にいらつしやる……」
と叫んだ。MARIA・イロと云ふ處女は近いて壘を手渡し、「早く聖水を振りかけなさい」と云つた。ベルナデッタは言はれるまゝに、野薔薇の方へ聖水を二三度振り撒いた。

「些も怒つていらつしやらない、却つて打うなづき、私等皆に微笑みなすつてよ」

とベルナデッタが言つたので、少女等は大に感じた。殊に自分等を見て微笑み

なすつたことを喜び、ベルナデッタの周圍に半圓形を作つて跪いた。

やがてベルナデッタは奪魂の境に入り、野薔薇の方を見詰めた。その目は火の様に輝き、もう此世の人とも思はれない、身は石像の如く不動となり、その顔色には或る見えざる光の反映があり、と讀まれ、それこそ地上の娘ではなく、天使が祈つて居るのだとしか思はれぬのであつた。

ベルナデッタは實に神を入れ奉れる靈妙なる器を眺め、その美に打たれて、我身も見ろく、天使の如くなつたのである。我等とても程度こそ異れ、始終この靈妙なる器に注意深き眼を注ぎ、その美德を觀想して居ると、何時しか天使の如き姿に一變することが出来るのちやあるまいか。

第三日 靈妙なる器 (其二)

(1) 聖母は既に聖寵の源たる神を入れ奉れる器であつたとすれば、有ゆる聖寵はこの器に貯へられ、この器よりして、生命でも、發展力でも、希望でも、其他すべての徳の寶が絶えず世界に溢れ出て居ることは言ふ迄もない所であらう。

舊約の太祖等が、遙に教主を待ち焦れて居る時、聖母は早や彼等の心に星と輝き、その柔い光を放つて彼等を慰め給ふのであつた。使徒等が布教上、容易からぬ困難に出遭して、途方に暮れると云ふやうな際に、之を激勵して、その挫けかけた勇氣を振興させ、聖會の創立事業に當らしめ給うたのも、實に聖母であつた。初代教會の信者や、童貞や、寡婦等は、未だ弱い、なよくした若樹の様で、一たび迫害の嵐に當てられたものなら、忽ち吹き折られさうであつたので、聖母は、その御言を以て、その御手本を以て、その燃ゆるが如き信仰を以て、その廣大なる權威を以て之に灌漑ぎ、之を支へ、之を保護し、無

事に成長さして下さつた。殉教者にしても、各修道院の創立者にしても、皆聖母によつて助けられ、聖母によつて善い考を萌まして戴き、聖母より溢れ落ちる聖寵を蒙つて、偉大なる決心も起し、一身を犠牲に抛げ出し、斃れて然る後に止むと云ふ程の精神に燃え立つを得たのである。カトリック教會内に興りし感嘆すべき事業の根底に立入つて見ると、一つとして聖母の御指先きの印されないのが見付かるだらうか。

(2) — なほ我等一人づゝの上に聖母の溢らし下さるその御慈愛の賜は如何ばかりであらう。神が人を御造りになつたのは、之に救靈を得せしめんが爲、之を永遠に幸福ならしめんが爲であつた。然し夫れには神の御働きだけでは足りない。人の方からもその自由意志を以て協力せねばならぬのであるが、さてその協力なるものがなか／＼容易な業ではない。「光あれよ」と神が曰うた時、光は御命令に抗ひ、「私は厭です」とは云はない、早速仰の儘にき

ら／＼と輝き渡つた。「星は夜の空に輝け」とお命じになるや、星は直様それに従ひ、夜毎に瑠璃色をした空際に輝いて、造主の光榮を歌つて居るのである。

人の靈魂も謂はゞ一個の光である。一個の星であるけれども、然しこれは考へる力を有つた光、自由を備へた星であつて、神が「輝け」と御命じになつても、暗黒を好んで照り輝かうとしないことが出来る。聲を掛けて御召し出しになつても、その御聲に従はず、罷出ようとしなことが出来る。では何うしたらば、この剛情な靈魂の首頂を擧げて總ての幸福の源なる神に従はせ得るだらうか。何うしたらば神と離れしめないで、何時も之と一致して行くことが出来るだらうか。聖寵は譬へば靈魂の血液見たやうなもので、之に離れると靈魂は忽ち死んで了ふのだが、何うしたらば、その聖寵を何時迄も保つて行くことが出来るのだらうか。

我等を神に繋ぎ合せるものは先づ祈禱である。我身が神に従属して居る、深くその御助に信頼んで居る、その御思を以て其思とし、その御望を以て我望として行きたいと云ふ心を之によつて表白するのである。次に祕蹟である。祕蹟は聖寵の雨露を僦に呼び下して、その祈禱の働をいよ／＼盛ならしめ、我等が全生涯を通じて神を愛し、神に己が愛情を披瀝し、神の御眼の前で立ち働き、その命じ給ふ所か、望み給ふ所かでないならば、決して手を着けないと云ふやうに、ます／＼神に密接な關係を結びしてくるのである。然うなつた時の嬉しさと云つたら、實に譬へ様もない位で、其時こそ我等は詩篇に歌はれてある、「その主人の手に目を注げし僕」の如く、神を怖れるのではないが、之を愛して、之を満足させ奉りたいと云ふ考から倦まず撓まずセツセと働き、神の御氣に適ひ奉るやうに心掛けて一切を行つて除ける。神を思つて心は激しく鼓動つ、喜悅の情に伸び／＼となつて来る、何時も明るく輝いて居て、曇つた

所や、暗い所は一つも見當らないやうになるのである。然しさうなつたのは、聖母の御蔭ではないだらうか。聖母がその愛の綱を投げ掛けて、我等を引寄せ下さつた、神の聖意に繋ぎ止めて下さつた、何時までも離れ得ないやうにして下さつたからではあるまいか。幾度も神を忘れ、聖母マリアを忘れ、己が浅ましさに負けて、時には知りつゝも忘恩の沙汰に出で、愛の綱を振切るやうなことをしたのだけれども、聖母が色々と勤めて、痛悔を起させ、再び神の御前へ立歸るやうにして下さつたお蔭ではあるまいか。

(3) 一兎に角、聖母はあらゆる聖寵を盛れる靈妙なる器である。この器から常に御哀憐を濺いで我等の眠を醒させ、浮世の馬鹿／＼しさを見せて下さる、肉の快樂の汚しさを覺らして下さる。質素で、慎深く、慾を控へ、身を苦め、心から神に奉仕へ、そして額は平和の光に輝き、心は喜悅の情に躍り立ち給ふのであつた御自分の清い／＼御姿を偲ばせて、身の飾よりも寧ろ靈魂の

飾を、體の樂よりも寧ろ心の樂を求め、次第に罪惡の中から引起し、徳の途を歩かせ、是まで腐敗の器であつた其人を、美しい、靈妙なる器となして下さるのである。

(實例) 第二回出現の續き——ベルナデッタは靜な晴やかさの中に柔らかな着を保ち、眞珠の如き美しい眼を輝かし、表情的な眺を洞窟の入口、野薔薇の上手に注いで、何物かを一心に眺めて居る、少女等が近いて、名を呼んでも、優しい愛情の籠れる言葉を言つても、身に觸れても、服を引張つても、何一つ感じないものゝ如く、たゞ顔には言ひ知れぬ天使のそれとも紛ふべき幸福を漾はして石像の如く跪いて居るのであつた。

少女等はベルナデッタが死んだか、死にかけたかと思ひ、聲を擧げて泣き出した。附近の水車業者ニコローと云ふ人の母と妹とがその聲を耳にして、何事ならんと馳けつけて來た。少女等は黙つたまま、ベルナデッタの奪魂せる姿を

指示した、二人の婦人は聖女の前にでも在るが如き慎ましい素振りをしてベルナデッタに近き、靜に聲をかけて呼び醒さうとしたが、然し彼女はたゞ聖母のみを眺め、その聖母にすべての注意、すべての官能を吞まれて外界の聲は全く聞えない。

ニコロー夫人は急いで水車の方へ立戻り、俸の今年二十八歳になるのを連れて來た。

俸は顔に侮蔑の色を顯はしつゝ母に尾いて洞窟の前に來たが、ベルナデッタを一見するや、忽ち尊敬の念に打たれ、自ら出現でも見るかの如く後退りし、長らく腕を組んでベルナデッタを見つめた。「私は彼んなに感動すべきものを一度も見たことがない、幾ら何う考へても彼の娘に手を觸れることは出來なかつた」と彼は後で人に物語つたと云ふ。是こそ聖人やら、聖物やらに接する時自ら心に湧き起る尊敬心である。

誰しもベルナデッタの如く面りに聖母を、仰視することは出来ないにせよ、始終聖母を思ひ、聖母を愛し、聖母に則るべく務めると、次第に聖母の如く、靈妙なる器となり、自ら人に尊敬心を抱かしめるに至るものである。

第四日 靈妙なる器 (其三)

聖母は有ゆる聖寵を溢らし給ふ器であるが、然し其器は「靈妙」なるもので、丁度靈が肉體に映らないが如く人には知られ給はぬ、世間の眼には見え給はぬのであつた。聖母が世に在す折には、人中に出しやばつて歩かうとはし給はず好んで世に隠れ、人に知れず、その高い美徳も、その驚くべき神の御恵も、深く包んで容易に之を人前に顯はし給はぬのであつた。總ての「婦人の中に祝せられ給へる聖母」は、亦總ての婦人の中に最も謙遜なる者に在したのである。

使等等は主の御名を世界の隅々までも携へ行つて、之を人々に知らしめる様命じられた。然し聖母の御名を弘めるやうには仰せ付かつて居なかつた。譯は他にあらず、初代教會に在つて最も急を要するのは、イエズス・キリストの神にして人、人にして神たることを異教者に向つて説き弘めるにあつた。若し初から聖母を尊敬するやうに教へられたら、不潔な女神を拜み馴れて居た彼等の目には、聖母もやはりさうした女神の如く映つたに相違ない。だから最初聖母はたゞ信者の間に尊ばれて、外には知られ給はぬ。世が移り、風俗が變り、人の性格も、思想も變り、聖會の働によりて天下が全く一新するに至つた上で、聖母を尊敬する習慣が初めて廣く世に行はれるやうになつて來たのである。

非常な遠距離にある星が煌々たる光を放つて居るものゝ、餘りに距離が遠い

爲に、其光が地上に達しない、人目には格別見えな、たゞ造物主の御前に照り輝いて其光榮を表はして居るが如く、聖母も神の御前にその御徳の光を輝して、その愛熱に燃え切れるのを幸福とし給ふのみであつた。

(2) — だからこの靈妙なる器には、徳の中にて最も隠れた謙遜が一杯貯へられてあつたのである。それもその筈で、家を高く築き上げるほど、礎を深く据ゑねばならぬ。然らば神の御築きになつた徳の家で、聖母ほど高く大きなのはないのだから、その基礎たる謙遜が如何に深かつたかと云ふことも、推して知られるであらう。

我身は偉大な聖人になつて居ながら、夫れを少しも氣付かないと云ふならば、夫れこそ誠に謙遜な人である。所で聖母マリアは神の御母たるべく預定されるほどの聖寵を忝うして居ながら、そんな事は夢にも思ひ給はず、救主を世に産み奉るべき御方の誰なるかを知りたいもの、喜んで之に仕へ奉りたいもの

のと、一心に待ち望んで居られた。早や諸の天使等は之を己が元后と敬ひ尊び奉つて居るのに、御自分は極めて卑しい婢で、婦人の中でも一番下位に置かれるのを喜び給ふ程であつた。

然しながら我身の偉大さが分つても、なほ傲りの念を起さないのは、より驚くべき謙遜ではあるまいか。聖母は既に救主の御母に選ばれ給うた。神に向つて「貴方は私の御子、私は貴方に對して母の権利がありますよ」と申上げることが出来るほどの高い位に擧げられ給うた。普通の女子ならば、思はぬ幸運にめぐり會ひ、玉の輿にでも乗れる身の上となつたらば、忽ち有頂天となり、曩日の明輩などは思ひ出しもせぬ、偶々途中で行遭つても、蔑んだ色を目元に浮べ、横柄な挨拶振りをするものである。然るに聖母は夫れほど高い位に擧げられたと聞き給ふや、是は何うしたことだらうと喫驚して、暫くは兎角の御返答もなし給はぬのであつた。自分の様な卑しい、拙らないものが、さうした高い位を



辱うするに堪へないと思つて、深く謙遜し給ふのであつた。

然し危険は未だ止まない。親戚のエリザベトはガブリエル大天使と同じ語を用ひて「御身は婦人の中にて祝せらる」と申し上げたのみならず、「信じ給ひし御身は福なる哉」とまで叫んだ。我等の爲ならば是れほど危い誘惑はないのであるが、流石は聖母である、其誘惑をも、美しい謙遜を以て見事に切り抜け給うた。我身の偉大さや、幸福を否定み給ふのではないが、然しその榮譽を悉く神に献げられた「萬代までも人は私を福なる者と稱へるでせう、それは神様がその召使の賤しきを顧み給うたからです」とお答へになつた。

(3) — 其他、聖母は何時でも、何處に於ても自分の影が薄れて見えないやうにと努め給ふのであつた。カナの婚筈では、一切を御子に歸し奉つて「その仰しやることは何でも致しなさいよ」と給仕の人々に命じ給うた。御子の御布教に當つて、人々は御教の有難さに感ずると共に、亦連りに御母の噂をしたもの

である。この辯舌の爽かにして、心根の美しい、柔和で、親切で、國民が擧つて御足の下に馳せ集まり、寝むことも、食べることも打忘れ、荒野にまで推しかけると云ふほど偉大なる豫言者の母君は如何な御方であらう、見もしたい、識りもしたいと一心に望んで捜求めたものであらうが、聖母は務めてさういふ晴れの場を避け、好んで人に知られまい、寧ろ無視せられようと務め給ふのであつた。

たゞ聖母が公に出でまし給うたのは、御子の痛ましい御受難の時であつた、人々が凱歌を奏して御子を歓迎する間は隠れて姿をお見せにならなかつたが、反對に人々が逃げ失せて了つた時、今こそ大なる勇氣を振ひ、涙を飲んで耐へ忍ばねばならぬと云ふ時には、早速姿を顯し、罪人の母と罵られるのも厭はず、十字架の下に踏み止つて微動だもし給はぬのであつた。

要するに聖母は有ゆる聖寵、有ゆる美德、有ゆる感すべき教訓に充滿ち給ふ

靈妙なる器にて在す。我等も力の限りこの聖母に倣つて靈妙なる器となり、基督信者の身に適はしき徳を之に盛ることにし、殊にすべての徳の基たる謙遜の徳を盛つて、次第に他の徳をも其上に築き上げるやうに努めなければならぬ。あゝ靈妙なる器よ、我等の爲に祈り給へ。我等をも御身の如く靈妙の器たらしめ給へ。アメン。

實例——ニコローの伴は畏多しとてベルナデッタに手を觸れなかつたが、母に強ひられて、靜に少女を立たせ、自ら片方の腕を執へ、他の一方は母が抱えて歩かせ、水車の方へ連れて行つた。然し少女は相變らず自分の目前に、頭より少し高く顯れて居る神秘的何物かに眼を注いで居る。人が目前に手をかざしても、頭を強いて下げさしても、復再び前の姿勢を取りて變らない。他の人には見えないが、たゞ自分に微笑ませ給ふその不思議な出現に全く吸ひ付けられて居るのであつた。

水車小屋に着いた時、少女は漸く我に歸つた。でも夫れと共に顔は如何にも悲しげに見えた。その打眺めて居た聖母のそれはく美しく、天上界のものたるに反して、周圍に眼を落せば、餘りにも平凡で、黄金と泥、光と暗の比どころではなかつたからである。

ベルナデッタは問はれるまゝに出現の聖母の御様子に物語つたが、それによると、年の頃十六か十七位で、眞白の服を着流し、それに空色の帯を前に結び、その帯の端は殆ど足にまで達き、頭にも同じく白色の布を戴いて、かすかに頭髪を見せ、その被布は肩と腕の上部に及び、背にゆつたり垂れて居る。足は素足で後の方は衣服の裾に隠れ、たゞ指先だけが見え、その指先に黄金色の薔薇の花が一つ宛ついて居る。右の腕には、眞白の珠を黄金の鎖でつないだロザリオをかけ給ふのであつた。是れこそ靈妙なる器がその美しい御姿をちらと覗かせ給うたものでなくて何であらうか。

第五日 崇むべき器 (其一)

(1) 聖母は靈妙なる器、數々の聖寵、神の驚くべき恩賜の充ち満てる器であつたが、然しその恩賜でも、その徳行でも、深い謙遜の下に之を包んで居られたから、格別人目には立たないのであつた。それにしても「隠れたるより顯はるゝはなし」で、幾ら隠さう〜とお務めになつても、その美しい恩賜の光その感すべき徳行の輝きは何處からとなく外に漏れ出て、視る人の心に自づと崇敬の念を起させるのであつた。聖會が聖母を稱へて崇むべき器と申し奉るのは之が爲である。

聖母はその感すべき御徳の爲に崇むべき器であつた——聖母が崇むべき器と稱へられ給ふ理由は、先づ聖寵に充ち満てる器であつたからである。既

に御やどりの其始より溢れんばかりに聖寵を蒙つて居られたが、その聖寵は日に月に増して殖えて、終には「ゼツセの根より咲き出し花」と尊ばれ給ふ神の御子さへも、其器に收め奉るに至られた。

婦人の身にして神の御母となり、神より「お母様」と呼ばれ奉るとは、何と云ふ大きな大きな名譽であらうか。是ればかりでも、聖母が崇むべき器と稱へられ給ふのに十分では無いだらうか。

してこの器は非常に廣大なものであつた。彼の廣い天さへも容れ奉ること出来ない御方を收め申されたのであるから、天よりも廣く、この大きな地さへも載せ奉ること出来ない御方を宿し給うたのであるから、地よりも大きい、と云はなければならぬ。

たゞ廣く大きいばかりではない。また實に純金の器であつた。この器の中に於てこそ純金の如き神性が、土塊の如き人性と合體され給ふことになつたので

ある。然しその拙い土塊も、聖母に觸れては非常に美しく輝くやうになつたので、神もこの人性と合體されるのを耻とは思召させ給はぬのであつた。

又この器は極めて堅牢で、其色澤は何時になつても褪める憂さへなかつた。人手に成つた器は幾ら傑作だと云つても、長い月日を経ると、色が褪めるやう、缺損けるやう、ひびが入るやう、火災に焼ける、地震に壊れる、洪水に流されると云ふ様になることが多いものである。之を美しく作り上げる手はあつても、之に長持てをさせる腕はない。昔の傑作と呼ばれる美術品の中に、全然無くなつたものや、地中に埋もれ、塵埃を被つて人に知られぬものや、何かの天災の爲に破損して僅に舊の俵を止めるに過ぎないものや、其等は幾百千の多きにつて居るだらうか。

我等の靈魂もそんな様なもので、最初洗禮を授かつた時は非常に美しかつたのであるが、智慧の開けるに随つて、段々悪を知るやうになり、終には罪惡の

泥までも塗り付けるに至つた。してその泥を洗ひ落さない中に、後からくと重ねて泥を浴せるやう、傷を付けるやうにして、終には大罪の龜裂が入り、聖籠も何も流し出して了つた。夫を見て神は口惜しく思はれた。守護の天使は悲んで泣いた。彼れほど高く擧げられて居たものが、何うして此んなに深く墮落したのであらう。昨日迄は天の星と輝いて居たものが、何うして今日は其光を失ひ、汚しい泥濁の中に投げ棄てられるに至つたのであらう、とお悲しみになつたのも無理はあるまい。

然るに聖母ばかりは、さうした不幸を全く知り給はぬ。聖母の御徳は色が褪めたり、光澤が失せたりするやうなことはない。たゞ美しいばかりで、何の汚もない。たゞ輝くばかりで何の曇もないのであつた。

聖母は地の芳香とも稱すべきイエズスを入れ奉るべく造られた香盆であつた。如何ほど密閉した香盆でも、中の香料が無くなると、次第にその香氣を失

ふものであるが、聖母の御徳ばかりは然うしたものではなかつた。香料たるイエズスが出で行き給うても、矢張りその床しい徳の香を保たれた。保たれたのみならず、いよ／＼その香を高くされた。聖母を崇むべき器と申上げ奉るのは無理もない次第ではあるまいか。

(2) — なほ聖母の崇むべき譯はその威嚴にあつて存する。試に聖母を仰視よ、如何なる威嚴、如何なる謹慎に輝き給ふのであらうか。聖母のお通り遊ばすのを眺めては、「御覽なさい、何とマア尊い御婦人でせう。彼の素振りのしとやかさ、彼の威嚴の慕はしさ！ あゝ足跡になり接吻したいものだな」と誰しも叫ばずに居られない程ではなかつたらうか。他の婦人ならば無遠慮に眺める、時としては主のお嫌ひ遊ばすやうな眼付で以て覗き込むこともあるが、聖母の様な美しい御方を見ても、人は不敬の思や、汚らはしい望やは露ばかりも起し得ないのであつた、見たばかりで我心までが改つた様な氣持がして来る。

聖母を仰視られるまで、一口なり言を掛けて戴き、たゞ少しなりと微笑んで戴く程にまで、我身が清淨くないのを耻ぢると云ふ位であつた。聖母を見て居ると、何時しか自分も善いものにならう、不足を矯め直さう、過失を悔改めよう、と云ふ氣になる。聖母の御前に立つたばかりで、我と我身を耻ぢて深く謙遜し、是れからは立派に自分の體面を維持し、身も心も清淨潔白に保つて行かうと決心せずには居られぬのであつた。

殊に聖母の崇むべき譯は其清淨にあつた。婦人の名譽は懸つてその貞操に在る。腐り果てた世間でさへ、貞操を以て婦人の名譽とする道は流石に辨へて居る。不貞操な婦人を罵つて「名譽なき女子、耻を知らぬ婦人、醜業婦」等と云つて居る。婦人の上に右の語を浴せる時は、拭ふべからざる耻辱の印を擦してやるのである。實に婦人に對しては、世の人も大概の事は勘弁するが、不貞操だけは決して容赦しないものである。

所で聖母はたゞ清淨であらせられたのみならず、亦實に童貞の御母であつた。昔しコルネリアと云ふ婦人は、己が二子を指して「是が私の寶玉です」と云つたさうである。

我カトリック教會も世の人に向つて、誇顔にその童貞者を指して「是が私の寶玉です、眞珠です、ダイヤモンドです」と申すのである。然るにその所謂童貞者たるものは、聖母マリアを鑑と仰ぐのではないか。聖母の御手本に倣つて、身も心も潔くイエズスに献げて居るのではないか。幾ら童貞者が白百合の如く清く美しく輝いて居るにしても、夫れは僅に聖母の童貞の影が射し込んで居るに過ぎないのである。

(3) — 終に崇むべきものは獻身的精神である。軍人が身を抛つて國家の爲に盡すとか、母親が病兒の枕頭に付き切つて、夜の目も合はさず一ヶ月でも二ヶ月でも看護するとか、失敗をしても、貧乏の手に掴まつても、病床に横は

つても、泣面を見せず、くよくよ言はず、神の思召と諦めて、ちつと目を瞑つて堪へるとか云ふやうなのは、誰の目にも崇むべきもの、感すべきものと映る。然し聖母マリアほど此等の美しい徳を身に備へた人があるだらうか。聖母は御子の敵に向つて瞬きもせずに突立ち給うた。胸は張り裂け、腸は切斷れる思はしても、咳かず、怨を言はず、チツと堪へ忍び給うた。人が罵れば祝して返し、嘲ければ讃めて返されるのであつた。カルワリオの頂に、十字架の下に踏み止つて、身動きもせず、迫害の嵐に揉まれても微懼ともし給はぬのであつた。随つて當時の信者等は、一目聖母を仰視ると、自づと勇氣が湧き、自分の憶病を耻ぢ、何處迄もその信仰の寶を抱きしめて動くまいと云ふ決心になれるのであつたらうかと思はれる。

是れほどの高い大きな徳を備へ給うた聖母であれば、聖會が口を極めて之を譽め尊び、「崇むべき器、我等の爲に祈り給へ」と申上げるのも當然すぎた當

然ではあるまいか。

(實例) 第三回の出現——二月十七日に聖母會の婦人が二人スピルスの家を訪れ、ベルナデッタを伴つて洞窟へ行かして戴きたいと母に懇願した。漸くその承諾を得て、翌十八日三人連れ立つて早朝から出掛け、洞窟の前に跪いて靜にコンタスを誦へて居ると、やがてベルナデッタは喜びの聲を擧げて「いらつしやいましたよ……それ其處に」と叫び、幸福に輝いた顔を深く地に平伏させた。彼女は聖母に眼を注いで、祈つて居る、微笑んで居る、さも幸福らしく見える。彼女の心と聖母の御心とはピタリと融け合つて、その楽しい幸福を撞にして居るのであつたが、然しこの日には奪魂する迄に至らなかつた。コンタスを誦へ終つてから、一人の婦人はベルナデッタに近い紙とペンを渡して

「その出現の夫人に、何か言ひたいことがあるならば、この紙に書きつけ下さる様、お願いいたしなさい」

と云つた。ベルナデッタは言はれるまゝに、二三歩洞窟に近き、足を爪立て、紙とペンを聖母に献げた。聖母はニコと微笑ませ給うたが、

「私 があなたに言ひたいことは、書きつける必要がありません」

と曰ひ、何か一寸お考へになつたかの様であつたが、

「あなたは十五日間こゝへお出で下さいませんか」

と頗る丁寧にお尋ねになつた。ベルナデッタは早速、

「承知いたしました」

と答へた。この日の出現は一時間ばかりに及び、聖母はベルナデッタに色々お話しになつた。その中に「あなたをこの世で幸福になすとは約束しません。後の世に於てですよ」

と曰うたのは、分けても注意に値ひする。實際ベルナデッタは死するまで人々

の反對、嘲弄、貧困、病氣、心の憊み等に苦しんだものであるが、そんな際は常にこの御約束を思ひ出して自ら慰めたものである。

第六日 崇むべき器 (其二)

(一) — 聖母によつて婦人の身は崇むべき器となつた — アダムとエワが罪を犯した爲め、人類は當然神に勘當され、見限られて了はねばならぬはずであつた。然し神はその限りなき御憐に驅られて、御子をこの世に遣し、忝くも人とならしめ給うた。是こそ人類再生の父たる第二のアダムで、この第二のアダムは人間の肉を着て居られても、實は全能全智の神、第一のアダムからすると、限りもなく完全な御方であつたのである。

でも人類の墮落は男女二人の仕業であつた以上、之を救ひ上げるにも、第二

のアダムだけでは物足りない、是非とも之に配するに第二のエワとも謂ふべき女を以てせねばならぬ。なるほど第二のアダムは全能全智の神で、神が神にたいて、人類の代りに謝罪して下さるのだから、第二のエワが居なくとも謝罪と云ふ點に於ては不足はないはずだが、夫れでも何やら物足りない様な心持がせられる。墮落前の第一のエワは、實に清い、美しい、以て人類の誇りとするに足るだけの婦人であつた。今第二のアダムが言ふに言はれぬほど美しく輝いて顯はれ給ふのに、亦第二のエワたるものが、清い、溫和な姿をして顯はれないでは、何うしても物足りない。家にあつても父ばかりで母が居ないならば、寂しくて、心細くて堪つたものではないであらう。

神は我等の心の要求を御存知あそばされ、婦人によつて人類の滅亡が始まつたのだから、亦婦人によつて其救ひが全うされるやうにと思召しになつた。我等が罪の贖をして下さつた父君の御前に拜跪けるのみならず、またその御

贖ひに手傳つて、言ふべからざる苦痛の中に我等を聖寵の兒女とお産み下さつた母君にも頼れるやうにと、お取り計らひになつた。斯の如くして聖母はエワの失つた名譽を立派に回復し給うたので、之を崇むべき器と稱へ奉るのは實に理の當然ではないだらうか。

(2) 次に原罪の結果として、婦人は最も悲惨な境遇に陥つた。ユデアに於て、男子は神に向つて、「主よ、私を婦人に生れしめ下さらなかつたに付けて、祝せられさせ給へ」と感謝すれば、婦人はたゞ謙つて、「主よ、私を思召のままにお作り下さいましたに付けて、祝せられさせ給へ」と答へるのであつたとか。

眞の神を認めて居たユデアに於てすら其通りであつたのだから、其他の國で婦人が如何に憐れな境遇に沈んで居たかは推して知られよう。ギリシヤやローマでは、法律上、婦人は家督を相続することも出来ねば、法廷に立つて証人と

なることも出来ない、哲學者プラトンの如きは「悪人の魂は其罪の罰として婦人の躰に這入らされる」とまで曰つて居る。斯う云ふ鹽梅だから、家に在つて女は父の意のままになり、嫁いでは夫の權下に服し、打たれようと、殺されようと、異議を申立てることすら出来ないのであつた。

我國に於ても、「婦人は罪障が多い、成佛が六ヶ敷い」と佛教で教へた結果、婦人は全く男子の奴隷であつた。幼い時から三従の教を吹き込まれ、家に在つては父母に従ひ、嫁いでは夫に従ひ、老いては子に従はねばならなかつた。明治の世に至つて、西洋文明を輸入してからは、幾分婦人の境遇が改善されたけれども、未だく／＼男子の玩弄物にされる場合が少くはないのである。

然るに聖母マリアが世に出でさせ給うてからと云ふものは、少くもキリスト教國に於ては、婦人の境遇が俄に一變して、再び最初の地位を回復することが出来るとなつた。神は女を作るに當つて、アダムの骨をお取りになつ

た。然し其骨はアダムの頭からお取りにならない、婦人は男子に命令すべき筈ではないからである。左らばと云つて奴隸となるべき筈でもないので、足からもお取りにならない。むしろ婦人は男子を愛さねばならぬはすであるから、心臓の邊からお取りになり、「人に似たる助手を作らう」と言うたのである。

所で神の御作は罪の爲に惡變して了つた。婦人は男子の助手ではあつたのだけれども、然し男子に似たやうな助手ではなく、實に禽獸のやうに、下婢の様に、快樂の道具、一時の玩弄物のやうに見做されて了つた。この威嚴を失ひ何等の尊敬をも受けられなくなつた女性を、聖母マリアが如何に改善し給うたかを見よ、ベトレヘムからカルワリオに至るまで、始終御子の御側を離れず、之を養ひ育てたり、之を布片に包んだり、その十字架の下に突つ立つたりして之を愛し、之を慰め、之に同情を表して、常に母たるのみならず、亦慈愛に満てる助手、改善されし女性、男子にも劣らぬ女性たることをお表しになつた。

そして聖母はその比びなき威嚴、その愛情、その熱心、そのすべての徳をば残らず之を後の婦人等にお譲りになつた。殊にイエズスを愛するの情を彼等にお鼓吹みになつたので、マルタや、マグダレナや、ヨアンナ、スサナなど云ふ婦人等は、主の御後に随つて、御身の周囲を周旋し、何くれとなく其傳道に手傳つた。彼等は實に最初の修道女と謂つても可いのであつた。使徒等が傳道に着手されるや、率先して歸依したのはやはり婦人であつた、聖ペトロから眞先に復活さして頂いたのは、ヨツベのタピタと云ふ婦人であつた。マセドニアに於てはリディアと云ふ婦人が第一に聖パウロの教を信じて洗禮を受けた。終にプリスカや、フラヴィア、ドミチルラ等の婦人は、キリスト教をローマの帝室内にまでも導き入れた、男子が這入れない所にまで婦人はよく這入つて行つたのである。

(3) 婦人がその名譽を回復したのは、主としてその童貞の徳に之れよるの

であつた。童貞より愛が生れた。實に童貞とは何ぞやと云ふに、身も心も残らず神に獻げ奉ることではないか。随つて童貞者は全く神のもの、神に奉獻され、神に嘉納られたものだ、己に屬する所は一物も残らぬ、身は潔く神に付してその淨配となり、之と密接に繋がれ、緊く一致されて居るのである。

童貞者は神を愛し、己が最も重んずる寶を、己が自由を、己が意志を、そのすべての思、そのすべての感情を残らず神に犠牲とする位だから、また「他人を己の如く愛すべし」と云ふ第二の掟をも完全に守るのは言ふ迄もあるまい。然り、身を抛つて各種の病院、孤兒院、養老院等を到る處に設け、貧困、老病、告ぐる所なきものを收容して、之を看護し、之を扶養し、之に身心の慰安を得せしめたもの、今も得せしめつゝあるものは、皆童貞者ではないか。彼等は博愛、慈善の看板を麗々と掲げながら、ひたすら名譽を釣らう、人に感嘆

されようと心掛けて居る賣名家ではない。むしろ隠れて慈善を爲し、忍んで世を益し、以て聊か聖母に則る所があり、神にもその赤き心の一端をお目に掛けたいものと、たゞ夫ればかりを務めて居るのである。

然し聖母の名譽に與るの幸福を得るのは、たゞ童貞者ばかりではない。總ての基督教婦人は、その獻身的熱誠、その香床しき聖徳、その敬虔なる工夫によつて、また聖母と共に崇むべき器となり得るのである。

婦人が自分の義務を完全に果すと、次第にその夫の上に勢力を得て、夫に尊敬され、其言は必ず聽かれる、その勧めは必ず用ひられる。その熱愛に當つては幾ら頑な心でも必ず熔けて流れる。幾ら六ヶしい氣質でも、和がすには居ない。婦人は一生の間、神を忘れて了つた老父母をも、改心させる道を知つて居る。現世の財寶に心を奪はれて、墓の向ふに生けるものゝ世界があるか、死後靈魂が果して天國に往つて神と共に樂むのかと云ふことも考へて居ない其

老父母をすら歸せしめる方法を弁へて居る。如何なる困難に出遭しても挫けないで、神と和睦した靈魂、永遠に滅びる筈であつたのが、永遠に生きられる様になつた靈魂の美しい姿を見て居るので、その老父母なり、その夫なりにその美を回復させでは措かぬのである。

聖母は崇むべき器、あらゆる榮譽を浴せられ給ふべき童貞者である。然し聖母の榮譽とし給ふのは我等の歌ふ頌歌よりも、我等の誦へる讚美の祈よりも、むしろ我等自身である。聖母の御鑑に則り、身も心も清淨に保ち、骨を惜まず、身を抛つて神を愛し、人を憐れで惟れ日も足らずとする我等の偽りなき誠心である。我等はこの誠心を盡して聖母を崇め、尊び、口でよりも、行を以て聖母の御光榮を歌ひ奉るべく務めたいものである。

(實例) 第四回の出現——十五日間つゞいて洞窟に行くべき約束をした旨をベルナデッタは母に打開けた。母は當惑して、妹ベルナルドの家を叩いて

その意見を求めた。妹は一日考へた上で、許して行かすが可い、してその實況を確めるのは我等の務だから、明日は二人でベルナデッタを連れて行かふとまで言ひ出した。よつて十九日の朝まだきに、母と叔母とはベルナデッタを伴つて、洞窟へ行つた。七八名の人がそれを知つて隨いて來た。

ベルナデッタは例の場所に跪き、或る光榮の一點を見詰めてコンタスを誦へ初めた。その一點は母にも叔母にも見えないが、然し彼女の魂を全く奪ひ、すべての物質世界、東の山の端にさし昇れる旭日でも、その光を受けて黄金色に輝ける岩でも、朝氣の清々しさでも、周囲の人々でも全く存在しないが如くたゞ唇には美しい微笑を湛へ、身は言ひ知れぬ幸福に酔へるが如く、喜びの色はその清き額を照し、顔は天使のそのの様、兩眼は熱して、しかも柔かに二つの星の如く輝いて居る。

母と叔母とは娘を見詰めて居たが、今まで人傳に聞いた所などは、到底その

實際に及ぶべくもない。ペルナデツタがこのまゝ地を離れ、兄弟たる天使に引取られて、天國へ飛んで行くのではあるまいかと思はれた。母は堪らなくなつて、「あゝ御主様、どうぞ娘をお引取り下さいませ……」と祈つた、他の人々も感嘆の聲を震はせながら、「何と云ふ美しい娘さんでせう」と叫んだ。斯くて一同は感涙に目を潤はしつゝ熱心に祈つた。然し言を發し、嘆聲を洩すものすらない。たゞ奪魂の境に沈める少女を打眺め、神を讚美し、天に向つて問ひ、自ら省み、默想しつゝその終るのを俟つのみであつた。

半時間ばかりも経て、娘は突然目をこすつて我に歸り、左右を顧みて母と叔母とを見當り、彼等はその幸福を分つが爲め、愛嬌を湛へて近いた、兩人は無言のまゝ、しかと娘を抱きしめた——聖母に特愛されるペルナデツタの如き子を持つた親は如何に幸福であらうか。それこそその清き無邪氣な童貞美によつて崇むべき器となつたものではあるまいか。

第七日 信心の優れたる器 (其一)

(1) — 聖母は神の御恵の充滿ちた、如何にも美しい器であるが、然しその器に溢れて居る御恵の中でも、ことさら我等の眼を引くのは、その優れて感ずべき信心で、聖母こそ實に信心の優れたる器なのである。

信心とは罪の曇りがなくて、心は成聖の聖籠に輝き、神を一心に愛し奉るに在る。然るに聖母は原罪の汚すらなく、罪と聖母との間には深いく越ゆべからざる淵が穿たれてあつた。その御心は合間に咲き匂ふ百合よりも猶白く高山の頂に輝く白雪よりも猶輝き、露ほどの汚點にも染み給はず、神の御目には如何にも清く、美しく照り映え給ひ、生れ落ちてから最後の氣息を引取り給ふ迄、その清淨無垢の光をいよ／＼眩きばかりに輝かし給ふのであつた。

聖母は既に原罪の汚に染み給はないだけに、我等の如く原罪の結果たる邪慾を知り給はず、惡に引かれる憂すら無く、聖寵は川を成してその靈魂に注ぎ入り、母胎にやどり給ひしその初より、早や「聖寵に充滿てるもの」と歌はれ給ふことが出来たのである。

(2) — 聖母はたゞ原罪の汚點に染み給はないのみならず、また如何なる罪にも傷き給はぬのであつた。聖母はたゞ神の御母の御位を以てのみ惡魔の頭を踏み碎き給うたのではない、一生涯の清き言、聖なる行を以ても、彼の驕慢を打挫ぎ給うたのである。斯の如く聖母は、邪慾に曳かれ給ふ憂とは露ばかりもなかつたにも拘らず、猶熱心に祈り、世に遠り、何事も控目にし、ちやうど過誤することも出来るかの如く、始終身を慎み、心を戒めて居られた。その御用心の深いこと、言つたら、大天使ガブリエルが神の御母に選ばれ給うた由を告げ奉つた時でも、この祝詞は如何なるものぞと胸を擾がせ給うた位である。

る。

終に聖母はその辱うせし聖寵を忠實に働かして、大に之を利殖すると共に、また新たな聖寵を、豊に蒙り給うた。随つて聖母はたゞ諸の天使や聖人等よりも勝れた聖徳に進まれたのみならず、その天使聖人等の徳を一つに集めても、遙に及ばないほどの高い徳域に達せられたのだ、と聖人等は申されて居る。實に聖母の御徳は殆んど無限の境を摩し、神の外には誰とてその高さを極め、その廣さを覺り得るものなしと云ふ程であつた。

(3) — 是は我等の爲に何と云ふ立派な御鑑であらうか。固より我等は聖母の如く原罪を免れて居ない、寧ろダヴィドと共に「視よ、我不義の中にやどされ我母は罪の中に我をやどしたり」(詩五〇ノ五)と痛嘆せざるを得ない身の上である。然しながら、その汚點は洗禮を以て洗ひ落された、よしや洗禮の後に犯した罪があつたにもせよ、悔悛の秘蹟を以て之を立派に取棄てることが出来た。

神の御目にはそれこそ清く、美しく映じて居るに相違ない。で今からは是非この超自然的美さを失はない様、注意しなければならぬ。世間多くの人の如く、罪は何でもないものゝ如く思つたり、弱い人間には到底免れ難いものゝ如く考へたりしないで、我等の靈魂に何よりの大害を及ぼすものは罪である、罪は總の禍の中にも殊更大きな禍であると思つて、之を恐れ、之を厭ひ、極力之を避けるやうに務めたいものである。

一日、佛王ルイ十五世の皇后マリア・レイジンスカの居間に宮女が這入つて見ると、皇后は潸然と泣いて居られる。怪んでその故を問へば、「今私は斯々の罪を犯したのよ、悲しくて堪りません」と答へられた。「夫れは大罪ではございません。極く軽い罪ですもの、そんなにお嘆き遊ばすにも及びますまい」と宮女が申せば「否、神様を愛する人には軽い罪はありませんよ。罪は皆重く見えるのですからね」と、皇后は仰せられたとか。我等も今から決して罪を軽く

見ないで、深く之を恐れるこの信心篤き皇后の如く、又總の聖人等の如く、殊に我等の保護者と仰ぎ、慈母と頼む聖母マリアの如く、罪を何よりも恐れ嫌ふ心にならなければならぬ。

罪を誠意から恐れ嫌ふならば、亦聖母に倣ひ、罪と靈魂との間に、祈禱や沈黙や、謹慎や、制慾やと云ふやうな障壁を築いて置きたいものである。我等の善く識つて居る處、今まで幾度となく罪を犯す原因となつた危い機會、我等の靈魂を弱めて、誘に遭ふや忽ち倒れ込む様になす悪友、良からぬ談話、怪しげな讀物、面白からぬ想像などを深く戒め、堅く取締りたいものである。

次に聖母の如く、戴いた聖籠を大に利殖せしむべく努めよう。完徳の道を歩き出した上は、決して中途半端で踏み止つてはならぬ。すべて靈魂上に就ては、進まざるは退くなり、此處までは信心の道を進む、是から前へは進まずとも可い等と夢にも思つてはならぬ。「汝等の父の完全になす如く汝等も完

全になれ」と主は曰うた。我等が到底通り着きも得ない神の完全さをば到着
 點と定め、之に向つて側目も振らずに突進せよと命じ給うた。であるから何時
 も止みなしに進んで行かう、屈せず撓まず進んで行かう。日にまし善より善に
 進み、徳より徳へと攀ぢ登り、終には完全の境にまで到着すべく奮發したいも
 のである。

(實例)——母と叔母とは歸宅の途すがらベルナデツタに出現の姫君が何と
 仰有つたかと問うた。

「私が洞窟に來たのを満足に思ふ、後で私に告ぐべきことがある、と仰有いま
 した」

とベルナデツタは答へ、併せて變なことを物語つた、

「私がお祈をして居る時、厭な恐ろしい聲が地の底から出る様に聴え、それが
 ガウ河の水の上に激しい雷の如く爆發しました。問ふ聲、答へる聲、又怒

つて喧嘩でもして居るかの様な聲が混つて聞えました、その中で一番鋭い、
 聞き苦しい聲が、私に、逃げる、逃げる、と叫びました。すると出現の姫君
 が急に頭を擡げ、盾毛を恐ろしく逆立て、河の方を睥みつけなさいますと、
 聲は忽ち八方に消え失せ、騒もそのまゝ止んで了ひました」と。

思ふに悪魔は少女とル、ドとの上に聖母マリアが抱かせ給へる御計畫の端を伺
 ひ知つたものである。無原罪の御やどりにたいする信心が、旭の昇るが如くル
 ルドの空に輝き初めて人の心を照し、無数の大衆は世界の八方から馳せ参じ
 て聖母を讚美する聲に天も地も鳴りどよめくべきことを見て、「逃げる、逃げ
 ろ」と叫んだ。是まで自分の手下について居た人々も、ル、ドに來て、その奇
 蹟を見ると、聖母を尊敬する氣になり、やがてカトリック信仰に立戻つてはな
 らぬと恐れて、「ル、ドに來るな、逃げる、逃げる」と勧めたのである。今日
 でも大抵の無宗教家はル、ドに行くことを欲せず、たゞ口を極めてル、ドを笑

ひ嘲り、罵つて居る。「逃げる、逃げる」と云つた悪魔の勧めに従つて居るもの
のと思はれない。

我國の宗教家、教育家、科學者にしてヨウロッパに遊ぶ人は多いが、ル、ド
に立寄つたと云ふ話は格別耳にしたことがない。やはり知らずながらも、この
悪魔の聲に従つて、成るべくル、ドを逃げて居るのではあるまいか。あゝ聖母
よ、我國の人々、特に學者等を憐みて、悪魔を睥み付け、彼等の身邊より遠く追
ひ退け給へ。アメン。

第八日 信心の勝れたる器 (其二)

(1) — 信心の第一歩は罪を避けるに在るが、然したゞそれだけに止つては足
りない。また進んで其身に及ぶだけの善業を勵まなければならぬ。

實に信心とは何かと云へば、己を全く神に献げ、その聖意に適ふことをす
べて残りなく、愉快に、軽々と飛び立つて果すに在るのである。聖母は幼少よ
り身も心も神の御手に献げて居られた。まだ主の御母となり給はぬ中から、神
は既にその心に在した。「主汝と共に在す」とガブリエル大天使に讃められ給
うたのを以ても知られる如く、聖母こそは夜も晝も神と離れず、神を忘れず、
たとひ其目は眠つても、その心は神を思つて醒め給ふのであつた。

いよくイエズスの御母となり給ふや、如何に優しい慈母の情を傾けて、御
子を愛し、勞り、慰め、一身を抛つて之が爲に盡し給ふのであつたらうか。

イエズスが饑を覚え給ふや、之に乳房を哺ませ、稍成長し給ふや、自ら食物
を調理し、その材料こそ貧しい家に相應しく、有觸れたものであつたにせよ、
然し慈母の誠意をこめて之を調理し、以て御子を養ひ育て、行かれた。

聖母は實に義務の婦人であつた。御子が全く聖母のものであらせられた如く

聖母も全く御子のもので、御子養育の大任をば他人に托けようとは夢にも思ひ給はぬ。幼い頃は之を産衣に包み、御成長の後は自ら御衣を縫ひ、裸體のまま十字架に釘けられ給ふや、己が衣を脱いでも、その裸體を蔽うて上げたきものと思はれたに相違ない。

聖母は十字架の下に附添ひ、暫くも御子の御側を離れ給はず、御子が苦み給へば之を慰め、嘆き給へば共に嘆き、罪人の爲に祈り給へば、自分も共に祈り給ふのであつた。

御子が最後の息を引取り給ふや、十字架より下され給ひし御體を受取りて御胸にしかと抱きしめ、その埃を拂ひ、その血の跡を拭ひ、之に香油を塗り、清かなる布に包み、新しき墓に葬り奉られた。

聖母はイエズスの爲になし給うた所を、また使徒等、及び初代教會の信者等の爲にも盡し給ひ、彼等を教へ、彼等の爲に祈り、活動もし、勧めもし、美し

い模範をも示し給うた。信者の中でも特に愛し給ふのは不幸に沈めるもので、之を慰め、之を助け、之に希望を起させ、之に天國を仰いで氣強く耐へ忍ぶ道を教へ給ふのであつたらうことは、當らずと雖も遠からずであらう。

(2) 我等もこの美しい御鑑に則る所があらねばならぬ。信心に志す以上は、聖母の如く心にイエズスを思ひ、口にイエズスの御名を言ひ、身は残らずイエズスに献げ、たとひ如何に辛い苦しい、堪へ難いことであつても、イエズスの爲ならば、イエズスの御光榮の爲ならば、何に由らず、身輕に、飛立つて、喜び勇んで之を遣つて除けると云ふ様に努めなければならぬ。

兎に角、我等も義務の人でありたい、我身に負はされた義務は、主の思召に出たのであるから、主が御手づから、我等の肩に打掛け下さつた十字架、重ければ重いほど、いよく貴重な、得難い十字架として、飽まで忍耐し、飽まで勇しく、出来れば感謝しつゝ之を擔ぐと云ふ様にいたしたいものである。

次にイエズスを愛するならば、またイエズスの愛し給ふ人をも愛しなければならぬ。然り、愛徳、行爲がないならば、信心はない、寄る邊なき人に同情を寄せて之を慰め、勞り、助けるのでなければ、愛徳行爲はない、貧に苦み、窮乏に悩み、疾病に泣ける人は、特にイエズスの妙體の一部を爲して居る、それこそ第二のイエズスである。彼等を憐み助けるのはイエズスを憐み助ける所以である。されば聖母の愛子となり、信心の勝れたる器となりたいたならば、また聖母の如くイエズスを愛し尊び、之が爲に盡すと共に、またイエズスの妙體にたいし、第二のイエズスにたいして慈善を施さなければならぬ。イエズスは幾度も乞食の姿をして、聖人等にお顯れになつたが、綺羅を飾れる富者となつて顯れ給うたことは一度もない。蓋し富者はイエズスに似て居ない、己が方に來給うても、その族に承けられず、何處を叩いても空間がないと謝絶され己を得ず牛馬を泊め置く洞穴にお宿りになつたそのイエズスに似た所がないからである。

ある。

(3) — 然し善業は信心の花なり、實なりであつて、熱心に祈り、神とよく一致を保つて、その根底を養ふ必要がある。聖母は御子の幼年時代から、御身の上で起れる出來事を心に留めて、考へ合せて居られた位であるから、況して御昇天後には、絶えず御子の御生涯、その御受難、御死去のことを心に留めて默想し給ふのであつたに相違ない。御子が天より御降り遊ばしたのは何の爲であるか、自分を愛し、世界を愛し給うたからではないか、愛して、この世に生き存へ、愛して苦しい勞働をなし、愛して如何なる疲勞、如何なる困苦、缺乏をも厭はず、福音を宣べ給うた。愛して言ふべからざる苦を堪へ忍び、鞭たれ、茨を冠され、十字架に釘けられ給うたのである。聖母は是等のことを絶えず思ひ廻らし、且は主の御受難、御死去の跡を辿り、毎日聖體を拜領し、以ていよゝ愛の熱を温め、主にあこがれ、主と物語り、主の爲に盡し、身命を抛つて

活動し給ふのであつたらうかと思はれてならぬ。

是こそ我等の爲に又なき鑑ではあるまいか。信心は慈善業の根底であり、この信心の火に温められなくては、神の爲め、人の爲に身を抛つて盡すこと出来るものではない。してその所謂信心の火を燃やす火爐はと云へば、吾主の御生涯や御受難の黙想である。殊に聖體拜領である。この二つがないならば、生命を抛つて蠻地に踏み込み、傳道に従事する宣教師も居なければ、傳染病者や癩病、患者の枕頭に付添ひ、己を忘れて夜も晝も彼等の看護に當る童貞も居ないであらう。この二つがないならば、愛によつて思ひつかされ、激勵され、發憤させられる聖なる事業、無私無慾な活動は消え失せて、たゞ利己的な事業、金錢の爲、名譽の爲、糊口の爲に果す事業のみしか残らないであらう。

しかも吾主にたいし、吾主の聖體にたいする信心も、聖母への信心がなくては保持し難い。何よりの證據は之をプロテスタント者に見ることが出来る。彼



等は聖母マリアへの信心を以て、迷心だ、偶像崇拜だ、キリストこそ我等の唯一の仲介者であり、救主である、之にさへ縋れば澤山だ、と口癖の如く叫んで居るが、然し彼等は聖母マリアへの信心を一擲した結果、次第にキリストへの信仰を冷まして懷疑に陥り、不信仰に流れ、キリストを以て神と崇めず、世の罪を救はん爲に天より降り給ひし神の御子を認めず、たゞ偉大なる人格者釋迦や孔子と並び稱すべき大宗教家に過ぎずと唱道するまでに墮落しつゝあるのである。

「前車の覆へるは後車の戒」、我等はプロテスタント者の不幸を憫み、彼等の爲に眞の信仰を祈ると共に、自分も彼等の如く覆らない様、心より聖母を崇め尊び、慕ひ愛し、その御名を讃め、その御光榮を歌ひ、その御鑑に則るべく務めよう。

なほ聖母に一身を献げ、更にその清き御手を経て、この身を神の御前に献げ

て戴くことに致さう、然し信心に價値あらしめるのは、全く己を忘れ、熱誠を傾け、神の爲め、聖母の爲には何の物惜みもしないと云ふに在るのである。斯くて心を傾けて神を愛するから、それだけその愛は熱烈になる。人を愛するにも、之を神に於て愛し、聖母に於て愛するから、それだけ完全に、しかも力強く愛することが出来るのである。

(實例)第五回 出現——ベルナデッタが毎日洞窟に行くと言ふ噂が高くなり、二月二十日、土曜日には、早朝から夥しい群衆が洞窟の前に推寄せた。朝六時半頃、ベルナデッタは母に伴はれて來た。群衆を見ても驚いた風さへせず、例の場所に跪き、コンタスを取り出して祈を始めた。數分の後ベルナデッタの顔は、まだ見えぬ太陽に照された高山の頂の如く、急に生々となり、兩眼は異様に輝き、唇は何かを言はんと欲するものゝ如く、やがて出現の聖母と楽しい談話でも始めたものか、耳を傾けたり、答へたりして居る。人々は聖

母を見ないが、然し其處に在すことを確信せざるを得ない。ベルナデッタの顔には、天上界のその如き喜びを溢らし、言ふべからざる幸福の表情で岩をちつと眺めて居るのを、人々は彼女の顔から岩に、岩から彼女の顔に眼を移して見守つて居る。母のルイズでさへ、ベルナデッタのその態度のしとやかさに驚き、涙を抑へながら、「あゝ私は何うしたんでせう、もう我兒を見識り得ませんよ」と叫んだ位である。

況して人々は腹の底まで感心して、何と云ふ美しさでせう「ほんとに天使ですよ」と囁き合ひ、少女の目の向いた方を打眺めて「彼處にその御方が居らつしやるのだ、ベルナデッタがその御方を見て居ることは確よ」と言ふのであつた。

奪魂が終つてからベルナデッタは人々に問はれて、出現の姫君より特別の祈禱を一語一語教はつた旨を打開けた。思ふに彼女は出現の姫君が聖母たること

は知らないながらも、その雪を欺く清淨無垢の前に立つては、我心の不完全さ汚らはしさを覚えて、それを聖母に訴へ、それを取る爲の祈禱を授かつたものであらうか。實に彼女は霧の中に咲き出でて朝露に潤へる美しい花の如く、その朝霧に汚されないのみか、却つてその鮮さを増し、太陽が昇つて來ると、いよ／＼美しく匂ひ溢れるのみであつた。是こそ信心の器にて在す聖母の溢を蒙つて、清く美しく照り渡り、いよ／＼その信心の火に燃え立つて來た結果ではあるまいか。

第九日 奇しき薔薇の花 (其一)

(一)―世に花ほど美しいものはない。人は美しいものを形容して、よく「花の如し」と云ふ。今聖母は正義の鑑である。上智の座である。崇むべき器であ

る。その美しさと云つたら、譬へ様もないのだから、聖會は之を花の中の花たる薔薇に譬へて、奇しき薔薇の花と讃め稱へるのである。實に薔薇は花の王と尊ばれ、その氣高く美しい色は、聖母の感すべき御徳を立派に寫し出して居るのである。

先づ薔薇の花は色から云つても類稀れである。白い乳色をした大きな花が、青葉の繁みに隠れて、すゞしい朝風に揺いで居る所だの、燃ゆるが如き眞紅なのが、しよんぼりと雨に濡れて、群れ咲いて居る所だのは、非常に美しい。而かも何處にか氣品があつて、現世のものとも思はれない位。所で聖母マリアはその潔き童貞、その汚なき御やどり、その一點の罪の垢にも染み給はぬ清い御心の上から云ふと、正しく白薔薇の花ではあるまいか、塵も止めない白薔薇が、夜露に濡めつたその花瓣を、きら／＼と朝日に輝かして居る所などを見ると、聖母が豊に聖寵の雨露に潤ひ、聖靈の御光に照り輝いて、いよ／＼そ

の清さを加へ、美さを増し給へる御姿を僣はずには居られない。

然れども聖母はたゞ清く白いばかりではない。また神の愛に眞紅く燃え立ち給へる奇しき紅薔薇の花でもあつた。聖母は神の御心に適ひ奉りたいと一心に望んで、其爲に己を苦めることも厭ひ給はぬのであつた。自分では一の罪すら犯した覺が無いにも拘らず、罪人の代りに御身を責め給うた。イエズスの如く、一生涯十字架を担いで、世の人の罪を償はれた。イエズスが人を愛し給うたから、御自分も同じく愛し給うた。世の人が神を忘れ、罪惡に浸つて居るのを見て、イエズスがお悲しみになつたから、自分も同じく彼等に對して同情の涙に咽ばせ給うた。イエズスが世の人の爲に死に給うたから、自分も如何なる苦痛をも甘じて堪へ忍ばう、神の思召ならば、喜んで血も流さう、生命も抛棄てようと決心して居られた。實に童貞の純白さに、愛徳の眞紅さ、この二つを巧に組合せた薔薇の花冠こそ春永久の天國に於て、聖母の御頭を美

しく装ひ飾るのではあるまいか。

(2) — 然し聖母は譬へようもない美しさに輝き給ふ中にも、亦凜として一種犯すべからざる威嚴を備へ給ふのであつた。イエズスが公に福音を宣へ給ふ時、その神々しい御聲、その淀みもない御話、その尊くも有難い御教に感じて聽く人の心は自づと吸ひ付けられ、熱心な婦人等になると、始終御後に付き隨ひ、何時になつても御側を離れないのであつた。マグダレナの如く、御足の下に坐つて何時までも御教の系に泣いて居るのもあれば、マルタの如く、いそぐと立ち廻つて主を厚く待遇さうと努めるのもある。ヨハンナなり、スザンナなり、ヴェロニカなりの如く、自分の財産を抛げ出して、御身の廻を周旋してあげるのもあつた。然し一方にはイエズスの一舉一動を探偵して、その缺點を摘發さう、不足を訴へ出ようと、油断なく附纏へる仇敵も居て、機會ある毎に「謀叛人だ、欺瞞者だ、惡魔憑だ」などと、惡口を利くのであつた。それ

にしても、たゞの一度だに、「不品行だ」とか、「婦人を近ける」とか言ひ立てるものは居なかつた。其肉を啖はねば止まぬと思つて居た程のフアリザイ人ですら、是ればかりは何とも云ひ立て得なかつたのである。此點に於てイエズスに似かよひ給へるは聖母マリアで、聖母もエルザレムの神殿へ參詣し、ナザレトの町中を出歩き、隣近所の人々とも親しく交つて、色々と談話もなさつたであらうが、然しその言葉にせよ、目付にせよ、身の進退動作にせよ、軟い光の中にも、何處となく威嚴があり、凛として一種犯すべからざる姿が浮んで居て、観る人毎に感心もし、愛慕もするが、狎れ褻すことは出来なかつた。その清い御姿を仰視ては、誰しも崇高な感に打たれ、汚らはしい思などは忽ち消え失せるのを覺えたものである。

(3) — 平素より聖母マリアに倣ひ、御後に隨いて進みたいと念願して居る我等カトリック信者も、さこそあつて欲しいものではないか………。世間は我等

を觀て居る、我等の一舉一動を察して居るが、然し自分から輕侮れるやうな事をしない限りは、幾ら世間でも輕じもしなければ、冷笑もしない。自分に似寄つた人間と見なければ、巫戯け散すやうな事はなし得ないものである。なるほど時として、心の清い、何處とて申分のない立派な信者を罵つたり、之に向つて悪口を利いたりすることもあるが、夫れは自分の方に靡かせ得なかつた腹癒せに然うするのであつて、心では實に感服して居るのである。そんな心の清い人は、謂はゞ「園の中に圍はれた美しい薔薇の花」の様なもので、なるほど時としては狂風に襲はれ、暴雨に叩かれて、其莖が狂つたり、その花瓣が二つ三つ打落されたりするやうな事がなきにしも限らないが、決して吹き折られはしない。その花は多少傷いたやうに見えても、祈禱や秘蹟の露を浴びてると、直ぐ前よりも美しく生々となつて來るものである。

我等も是非さうした美しい薔薇の花であらねばならぬ。だから何時もく彼

の純白、眞紅な「奇しき薔薇の花」に眼を注ぎ、之を模範と仰ぎ奉らう。聖母はたゞの一度でも、世間の狂風に揺られ給うたこともなく、一寸の間でも罪惡の暴雨に叩かれて萎れたり、花瓣を打落されたりなさつたことはない。でも我等が弱い身を持ちながらも、御自分に倣つて聖會の御園に清く美しく咲き溢れようと努めるのを見給うては、喜んで救ひの御手をさし伸ばし給ふのは、疑を容れざる所である。

(實例)——第六回 出現——二月二十一日は日曜日であつたから、觀客は特に多かつた。ベルナデッタは例の如く洞穴の前に跪き、右の手には火を點した蠟燭を持ち、左の手にロザリオを爪繰つて居たが、忽ちその顔は一變し、その眼は幸福に輝いて來た。醫學上からベルナデッタの容體を研究する積で、俟ち構へて居たドズー博士はその時ベルナデッタの手を取つて見たが、脈は靜穩、平常、呼吸も安らかで、何等の興奮せる様も見えなかつた。

ドズー博士が手をさし置くや、ベルナデッタは起つて少しく洞窟に近いた。今迄言ひ知れぬ幸福に漲つて居たその顔は急に悲みの色を帯び、涙が兩眼より溢れ、頬を傳つて流れた。ドズー博士は不思議に思ひ、後でその譯を問ひ、次の如き答を得た。

「姫君は一寸私から眼を移して、私の頭越に向ふをお眺めになりましたが、御顔は眞個に悲しさうでした。私はその譯を尋ねますと、再び私をお眺めになつて、「罪人の爲に祈りなさい」と仰有いました。そして間もなく親切で、晴々しい御顔になられたので私も安心しました。それから出現は直ぐ消え失しました」この間にベルナデッタの手にせる蠟燭の火は幾度も消えた。ベルナデッタはその都度、近くの人に手をさし伸して、それに火を點けてもらつた。この蠟燭の火こそ聖母の明るさに輝けるベルナデッタの姿そのまゝで、聖母が消え失せ給ふや、彼女の容貌も平素の姿に返るのであつた。彼女は「奇しき薔薇の花」た

る聖母に感化されて、その進退舉動までが、あつさりとして、しかも慎ましやかに、何とも知れぬ威嚴を備へ、人をして自ら尊敬の念を發さしめたものである。

第十日 奇しき薔薇の花 (其二)

(一) 薔薇の放つ高く床しい香は、聖母がその勝れたる御徳を以て、廣く世界を感化し給うたことを俾はせるのである。薔薇の花は固より美しい。譬へようもない。然し色にも優りて特に嬉しいのはその香である。花にして香の無いものはあるまいが、薔薇の香は別でも高く床しく、立派に聖母の御徳を象つて居るのである。「雪よりも白い百合の花からは、希望の香が射して来るやうに思はれる」と聖ベルナルドは云つたが、眞紅な燃え付くやうな薔薇の側に近

寄ると、芳烈な愛徳の香を、ゼトには居られまい、聖母は實に愛の御母で、その御心は始終愛熱に燃え立ち給ふのであつた。その汚なき童貞も、麗はしくはあつたが、到底その感すべき愛熱には及ぶべくもなかつた。薔薇は概して紅色が多い、紅色は火の色である。血の色である。一見したばかりでも愛の火を思はせる。愛の結果として流される殉教の血を思ひ浮べさせる。して見ると「奇しき薔薇の花」と呼ばれ給ふ聖母マリアからは、愛の香が常に馥郁と流れて居て、一たび其香に接したるものなら、誰しも熱く神を愛し、聖母をも愛し奉る氣にならずには居られないはずである。

先づ聖母は心より神を愛し給うた。そして神が人を愛し給ふのを見て、御自分もまた熱く人を愛し、人の爲にその最愛の御子を犠牲に供するのも厭ひ給はなかつた。その御子が有りと有ゆる苦痛を受け、十字架に磔けられて御死去あそばすのさへ御承諾になつた。我等もこの愛の香に引付けられて、一心に

神を愛し、聖母マリアをも愛せねばならぬ。神の御名を輝かし、聖母の御光榮を揚げ奉る機会にあらば、滿腔の熱誠を絞つてその爲に働かねばならぬ。然し夫れと共にまた神と聖母マリアの愛し給へる人をも愛しよう、病者、貧困者、老人等を愛して、彼等の爲に多少の時間を潰し、お金を費すのも惜んではならぬ。斯の如くして聖母の御手本に倣ひ、何とも知れぬ愛徳の香を附近に散らしたらば、知らず識らずの中に、人を神の御前に、聖母マリアの御膝下に引寄せることが出来る。彼の憐れな靈魂は皆聖母マリアの愛し給ふ子女、我等の兄弟姉妹であるから、我等が「奇しき薔薇の花」の香に感じ、その愛徳に倣つて彼等を愛し、彼等の爲に身を抛つて逝すよと御覽になつたらば、聖母も如何に喜び給ふであらうか。

疫病が盛に流行する時、殊にその疫病に斃れた死骸を置いてある室内などに、空氣までが病毒の爲に腐敗して来る。その腐敗した空氣を吸ひ込んで、

自分も何時しかその恐るべき病菌に當てられて了ふ。だから然ふ云ふ室内には、石炭酸を撒いて之を消毒すると共に、また空氣を清めて、其中に浮游せる病菌を殺すが爲に、よく香を焼くものである。

精神界でも同じ道理で、我等の吸つて居る空氣は實に腐敗して、病菌がウヨクとして居る。到る處に誘惑の手は俟ち構へて居る。見るもの聴くもの、罪惡の種子ばかり、日々讀んで居る新聞にせよ、共に往來して居る友人にせよ、坐つて居る店先にも、出て働く工場にも、一つとして病菌の附着かないものとは無い。さうした恐ろしい病菌を殺して、その害毒を蒙らない爲には、屢々告白の石炭酸消毒をせねばならぬが、然し夫れは何時、何時も遣れるものではないから、平生は我身に香水を振つて置く、「奇しき薔薇の花の香」を我身に附けて置くことにしよう。即ち二六時中聖母を思ひ、聖母を讃め、聖母を愛し、聖母の美しい清淨、感すべき愛徳等を慕ひ、朝な夕な之に則りたいと努めて居

るならば、たとひ腐つた世の中に住はねばならぬ、臭い／＼死屍の間に止らねばならぬにせよ、決してその病毒に當てられる氣遣ひがない。否な其身からも言ひ知れぬ芳香を放つて、世の中の空氣を清くし、腐敗した人の心を新にし、死んで居る人までも復活させることが出来るのである。

(2) — プリニウスと云ふローマの博物學者は、「薔薇の冠を額に戴いて居ると頭痛が和ぐ」と書き残して居る。何んな意味で書いたものか、その邊は判然しないが、之を靈魂上に當て嵌めて曰へば、色々の拙らぬ思ひ、馬鹿／＼しい考こそ、我等の靈魂の頭痛とも言ふべきものであらう。「奇しき薔薇の花」なる聖母マリアを豫ね／＼頭に思ひ浮べて居ると、確に是等の頭痛を癒され得るのである。

殊に青年處女の爲に頭痛と云へば浮氣と虛榮心とである。青年處女たるものは、平素より貞淑な、慎深い聖母の御立振舞を鑑と仰ぎ、現世は假の世、旅

の空だ、現世の榮華や快樂は夢の夢、擱んだかと思へば忽ち消え失せて了ひ、跡にはたゞ失望と、良心の咎責とを残すばかりだ、と云ふことを思ひ、以て其等の浮氣病や虛榮痛を驅逐さなければならぬ。

別けても謙遜の美しい徳を植付けて、その頭痛を根治すべく努めよう。薔薇は色こそ美しいが、其樹は何の取柄もあるものではない。櫻樹の如く堅いものでもなければ、杉や松の如く長大くもならない。細工物に使はれず、薪の用にも立たず、少しの風にさへ倒れたり、吹き折られたりするものだ。されば薔薇にしてもし情あらば、たとひその花の美しさを誇らうとしても、その樹の弱い、用ひ所の無いのを見ては、夢にも虛榮心など起し得ないであらう。青年時代がさうしたもので、それこそ若々しい、赤い色の沸つた、才智もある、學問も出来る、將來畏るべき人物になりさうだ、と人に望を屬されて居るが、未だ蕾の綻び終らぬ中に、神に摘み取られぬにも限らない、その際、天國は聖母の御傍

へ移され得たらば、何よりも結構だが、然し其爲には、些しも萎れた所がなく、何時も清く、生々して居なければならぬ。

(3) 薔薇には棘刺がある、棘刺によつて其花を保護される。我等も我身の徳を守り、之を汚さずに保つて行くには、棘刺を以て心を取締る必要がある。悪魔でも悪人でも、その毒手を差し出し得ないやうに、世間の譽言に欺されず、肉の快樂に酔はされないやう、嚴格に我身を持し、自分はカトリック信者だ、神の愛兒、イエズスの兄弟、天國の相續人だと云ふことを夢にも忘れず、苟にも禮儀、作法を亂さず、やたらに巫戯け散すが如きことのない様にと努めたらば、我等の靈魂も、清い、生々した色を何時までも保ち、馥郁と氣持のよい香を放つことが出来るであらう。

(實例) — 聖母は出現を重ねるに隨ひ、ベルナデッタに超自然的教育を施し給うた。第四回出現の際には、たゞ一睜みで悪魔を追ひ散して、その驚く

べき力を顯し、第五回出現の際には、ベルナデッタに特別の祈禱を授けて、童貞の清さを保つ決心を固めさせ、併せて厚く神に信頼せしめられたが第六回の出現を以ていよいよその教育を完成し給うた。「罪人の爲に祈りなさい」と命じて、愛の限界を擴大し、神に遠かれる憐れな靈魂にたいして同情を燃さしめ給うた。

「罪人の爲に祈りなさい！」ベルナデッタは一個の重大な使命を承つたのである。彼は前回に教へられた祈禱によつて聖とされ、使徒たるの準備を完成したのであるから、茲にその天職を托せられ、罪人の改心を謀るべく仰せ付つたのである。ル、ドに於ける出現の目的と、その動機は此に在つた。なるほど體の病も千万と癒されたが、然し心の病の癒されたのはその數を知らぬのである。それはベルナデッタを始め、人々が聖母の御勧めに従ひ、罪人の爲に祈つた、今も祈り續けて居るからである、「罪人の爲に祈りなさい」、聖母は我等

にも同じ使命を托せられたのではないか。我等も罪人の爲に祈らなければならぬ。殊にベルナデッタの如く、心を清淨に保ち、身を聖ならしめ、神と聖母の御旨に適ふほどの人物となり、薔薇の如き馥郁たる香を放ちつゝ、熱心に、根氣強く、厚い／＼信頼を以て祈つたならば、その効果は著しいものがあるのである。たとひ一生の間、徳を香はせ、一心に祈つて、唯だ一個の魂を改心せしめ得たにしても、大した働きをなしたのではないか。一人の罪人の改心が、天國に於て如何なる喜びの種となるかを思はゞ、決して等閑に付し去るべきものではない。

第十一日　　ダウイドの塔　　(其一)

(1) 塔とは敵を防ぎ、身を安全に保護する爲めの城樓を指したもので、往

古は賊が村邑を掠め廻ると見るや、人々はよく城樓に逃げ込んで、その害を避けたものである。聖母を呼んで「ダウイドの塔」と稱するのは、我等が悪魔に襲はれ、救靈の危きに臨む時、駆け込んで安全に保護して戴ける城樓の如きものだと云ふ意味である。

舊約歴史を讀んで見ると、ダウイドはエルザレムを都とし、都の一方なるシオン山に要害堅固な城を築いた。後日その子サロモンはその城を歌つて「汝の頸項は、ダウイドの塔の如し、その上には一千の楯を懸けつらぬ、皆勇士の大楯なり」(雅歌)と讚美して居る。是こそ實にイスラエル國民の誇とも信頼ともなり、敵をして膽を寒からしめたものであるが、聖母マリアもダウイド王の子孫であり、御胎には、人類の唯一の希望なる救主をやどし給ひ、悪魔をして戦慄かしめ給うたので、立派にダウイドの塔と呼ばれ得給ふのである。この塔はそのよつて立てる徳から見ると、非常に高く、而も用心とか、謹慎とか勞

働とか、祈禱とかを以て、之を彌が上に堅め、流石の悪魔も近き得ない位に堅固に構へてあつたのである。

(2) — 先づ聖母はダウイドの塔であつた。悪魔が地獄の總勢を繰り出して攻め寄せても、到底之を陥れること出来ない程の堅固な塔であつた。されば平素聖母を深く尊び、敵が襲ひかゝつたと見るや、早速聖母の御名を呼んで、このダウイドの塔に駆け込みさへしたら、敵の手に落ちる氣遣ひとはないものである。

次に聖母は高い塔であつた。その思、その功績、その内心の徳などを以て非常に高く在した。

聖母は何時も思を高く天の上に擧げ、神の御稜威の輝き在す天の上の上にも擧げ、始終天使等と交り、聖三位と物語つて居られた。たとひ身は世間に在しても、心は決して世間を愛し給はず、世間の空しい榮華を慕ふとか、世間の

儻い歡樂に憧憬れるとか云ふやうなことは全く無かつた。さらばと云つて、たゞ高い／＼天のことばかりを夢みて、自分の務を怠り給ふのでもない。聖母ほどよくその家を治め、主婦の任、母の務を忠實に果たした婦人はあるまい。其家は狭隘いながらも清潔である。聖ヨゼフにせよ、御子イエズスにせよ、お粗末ながら、破れぬ、汚れぬ、小ざつぱりした服を着けさせ給うた。機も織り給へば、裁縫もお出来る。編物もお上手で、毎日／＼さうした仕事の手を休止め給うたことなく、十分念を入れて家事を治め、夫の爲に、御子の爲にお働きになつた。然し其間にも心は常に神と一致して居る、思は常に天上に飛んで居ると云ふ鹽梅であつたのである。

聖母はその功績を以て非常に高くお登りになつた。「富を積みし婦人は多けれど、汝はその總てに超えたり」(三ノ二九)とサロモンは云つて居る。實に聖母の功績と云つたら、諸の天使、聖人等のそれを一つに集めたのにも遙に

超え、たゞイエズスの限りなき功德の次に位すると云ふのみであつた。試に聖母の堪へ忍び給うた数々の御苦痛を思ひ、ペトレヘムで、エジプトへ流浪の折、ナザレトに住ひ給ふ間、殊に十字架の下に於て、言ふべからざる悲嘆に沈みながらも、神の思召に従ひ、泰然自若として動き給はぬ其勇氣のほどを思へ、聖母の御心には苦痛の劍が一生涯突き立つて居た。殊にシメオンの豫言を御耳にされてからと云ふものは、斷頭臺に上るべき期日を俟つて居る死刑囚も同様に、カルワリオの慘酷しい姿は絶えず御目の前にちらつて居たに相違ない。随つて其等の悲哀や、苦痛を神の爲、人の爲にちつとお忍ひになつた聖母は、夫れによつて如何ばかりの功績を積ませ給ふのであつたらうか。

然し聖母の御靈魂に備はれる御徳の高さと云つたら、それは／＼筆にも辭にも及ぶ所ではなかつた。我等は人を愛すれば愛する程、其人に要求する所も多きものである。其人が親切で、愛らしくて、智慧が深く、義侠心に富み、種

々の困難に揉まれて居て、十分頼りとするに足るだけの人物であつて欲しいものだ、意志は飽まで強く、心は飽まで親切で、その美しい徳の光が人物の外にまで輝いて居ると云ふ位にあつて貰へば、と思はないだらうか。然るに我等の愛する聖母が丁度然うであつた。

聖母の意志は飽まで強く、如何なる悲哀に襲はれても、如何なる苦痛に揉まれ揉まれても、微動だもし給はぬ。エジプトに落ち行き給ふ時でも、カリワリオへの途中、御子に行遇ひ給うた時でも、ひるみ給ふ御氣色とはなく、生血の滴る十字架の下にさへ、婦女子の弱い身もちながら、ちつと突つ立つて動き給はぬのであつた。

御心は飽まで親切で、最愛の御子が言ふにも言はれぬ悪罵、冷笑を浴せられ無理無惨に打叩かれ、勞かれ、十字架にまで磔けられ給うても、悪黨を怨んだり、詛つたり、御立腹なさつたりし給ふ様なことなく、寧ろ彼等の救靈を心に

望み、御子の苦に自らの悲哀を添へて、彼等の爲に罪の赦を祈り給ふのであつた。

終に御心中に輝ける御徳は、天使等が之を悟ること出来るばかりで、我等は到底之を説明するだけの言葉すら持たない位、たゞその御言、その閑雅なる御舉動、その童貞の清さを仄見せる憤ましさを等によつて、僅に之を想像するより外はないのである。

斯の如く聖母はその思を以て、その功績を以て、その聖徳を以て雲突く塔の如く、高く、高く、聳えさせ給ひ、それと共に流石の悪魔奴も何を何うすることすら出来ないほど頑丈に構へられ給ふのであつた。原罪の汚れなくやどされ給うた其日から、悪魔は何うにかして其信仰を崩してやらう、其光を曇らしてやらう、その徳を傷けてやらうと色々試みたに相違ないが、夫れは皆失敗に畢つた。「巖」と呼ばれ給へるキリストの上に築かれ給ひしこの塔ばかりは、悪魔が幾

ら死物狂になつた所で、齒形の一つでも付け得るものではなかつたのである。

(3) — 要するに聖母は非常に高く、又非常に堅固な塔であつたから、之に駈け込んで御援助を求めさへすれば、悪魔が如何に激しい攻撃を加へても、打敗られる氣遣ひとは無いものである。其上、聖母は高い塔の上から展望をして居られ、敵が襲撃し來るや、直に夫れと知らして、嚴重に警戒さして下さる。我等の眼を醒させ、罪を痛悔さして下さるのである。聖母はフランスのボンメンにお顯れになつた時、「でも祈りなさい、子女等よ」と御注意になつたことがある。罪を悔い悔めるのと、神の御助力を熱心に祈るのとは、如何なる敵に當るにも極めて必要だ、たとひ自分の塔の中に逃げ込んで來ても、是れだけの用意がないならば、到底勝利は覺束ないぞよと、御諭し下さつたものではあるまいか。

兎に角、聖母は要害堅固な塔である。この塔は保護されて居る間は、全く安

心だ、何にも氣遣ひするには及ばない。たゞ悪魔奴はこの塔の附近を徘徊つて、好き餌もがたと油断なく狙つて居るのだから、迂かりこの塔を離れて、其邊をうろくして居ると、忽ち彼の毒手に掛つて、その捕虜とならんにも限らない。だから好奇心を戒めねばならぬ。エワを見よ、悪の何たるかを知らなかつたのに、物好きにも夫れを知らうとした爲に、到頭あの様な始末に立至つたではないか。

(實例)―出現なし―出現の噂がだんく高くなり、観客は日を追うて増加する一方である。ル、ド町長ラカデ氏、検事チユートウル氏、警部ジャコメ氏等は、さう大勢が集るのを穩かならずとなし、ベルナデツタを説諭して洞穴行きを止めさせんものと、先づチユートウル氏がその説諭方を引受けた。然しベルナデツタの無邪氣な態度、確信に満ちた應答振には、流石の検事も心密に感嘆の舌を巻かざるを得なかつた。是は二月二十一日、日曜日のことである

が、其日の夕方警部のジャコメもベルナデツタを警察署に呼び付けて、洞穴に行くのを禁じ、欺したり、騙したり、嚇したりして、彼女の口より洞穴に行かないと言ふ言質を得ようとしたが、ベルナデツタは聖母への約束を楯に取り、頑として應じない。持て餘して居る所に、偶父のスピルスが心配して警察署を訪れ、斷じて洞穴に行かせないと安請合ひをして了つた。

翌二十三日ベルナデツタは父母の命を守り、洞穴へは立寄らないで學校へ行き、正午少し前に歸宅して晝食をなし、再び學校へ出かけた。然るに學校へ下る岐路にさしかゝると、何か見えない柵があつて一步も前進されない、幾度もその柵を破つて進まうとしたが、全く無益であつた。彼女は俄に胸騒ぎを覺え我と我心を調べて見ると、自分は十五日間洞穴へ行くと云ふ約束に背いて居る然しその約束を守らうとすれば、父母の命令に背く譯になる、どうしようかと躊躇して居る時、忽ち足は一種の打勝ち難い力に運ばれて、洞穴さして歩き出

した。警部ジャコメの命により見張をして居た二人の警官は、早速其後を尾けて水車の所でベルナデッタに追付き、

「オイ、何處へ行くのか」

と問うた。ベルナデッタは見向きもしないで

「洞穴へ行きます」

と答へて、そのまゝ歩を續け、平日の如く洞穴の前に跪いた。二人の警官はさも恭しくベルナデッタの側に立つて、その一舉一動を見守つて居るが、彼女の長い祈禱を妨げようとはしなかつた。でも今日に限つて彼女の顔には何等の異様も見えない、聖母は終に顯はれ給はなかつた。ベルナデッタは是こそ自分が約束を守らなかつた罰だ、その爲に彼の優しい、天上界のお顔をお見せ下さなかつたのだと悟つて、自ら深く謙遜した。然し悲みの色は顯はさないで、靜に起つて水車の所へ行き、其處のベンチに腰掛けた。

ル、下の識者達は、それ見よ、と云はんばかりに肩を揺り、「ジャコメさんは豪いよ、警官を遣したら、姫君が出て來なかつたんだ。是じや姫君に強ひて岩を下り、他へ移轉させることも出來るな」と冷笑つたものである。

爲に聖母の名譽は甚く汚され給うたかの様に見えたが、然しその爲にベルナデッタはいよく謙遜深くなり、父母もまた娘より事の由を聞き、そんなに柵が横へられたり、或る優れたる力に強ひて曳かれ行つたりしたとすれば、今後洞穴に行くのを禁めてはならぬと思ひ、随意にせよと許してくれた。結局は聖母の思召が果され、ベルナデッタの望も遂げられることになつた譯である。

第十二日　　ダウイドの塔　　(其二)

(1) —神は預言者イザヤの口を藉りて、イスラエルの民を葡萄園に譬へ、「我

が愛する者は土肥えたる山に一つの葡萄園を有てり。彼その園をば鋤き返し、石を除きて、良き葡萄を植ゑ、其中に望樓を建て、酒搾をほりて、葡萄の實を結ぶを望み俟てり（「イノザヤ」）と曰うて居る。思ふに我等もこの葡萄園の如きものではあるまいか。

我等は神の特愛の子女である。我等の靈魂は良い肥えた土地で、而もこの土地の上には、毎日毎日聖寵の雨露が降り濺いで居る。既に神禮を授かつた其日から、信望愛等の超自然的葡萄樹を植ゑ付けて戴いた。無邪氣な、罪に汚れない幼兒の靈魂は見事に花を咲かした葡萄園見たやうに、清い香が馥郁と零れて居るのである。神は之に慎やら、用心やらと云ふ様な垣を繞らして置かれた。始終親の口を以て、司祭の言を以て「腐つた世間に欺されるな、悪い友に曳されるな、良からぬ書を読んではいけない、罪の機會を慎んで避けよ、悪に汚れるな、信者の品位を保て、青年時代は美しい花だ、迂かりして汚れた手に

摘み取られるな、世間は不潔な口をつけて萎らして了はうとするものだ、用心の垣を繞らせ、決して／＼そんなものを近けてはならぬぞよ」と、繰り返しく注意して下さるのである。

(2) — なほ葡萄園の中には見樓を設けてある。時として賊が垣を破つて中に飛び込み、番人を斬り倒し、折角立派に實つた葡萄を喰ひ潰さうとしないにも限らない。斯る時に、番人は逸早く樓の中に駆け込み、其上から賊を威嚇し打倒し、追拂ふのである。

この樓こそ正しく聖母マリアではあるまいか。聖母は御子イエズスと共に我等の心に住み給ふ。邪慾や悪魔が内外から猛り狂つて、我等の心を荒さう、無罪を脅さう、決心を打破らう、潔白を汚さうとすることは一度や二度に止らない、然し我等が聖母の樓に駆け込んで其處を離れないと共に、たゞ一口「そんな事は厭だ、出来ない、立退け」と怒鳴りつけさへすれば、その敵を追

拂ひ、心の葡萄園を安全に保つて、徳の實を立派に結ばせることも出来るのである。

戦は左まで困難でない、勝つか敗けるか、安心ならぬと云ふ程でもない。常に用心の垣を繞らして置き、万一其垣を突き破つて中へ這入られた時は、樓の中に駆け込む、聖母マリアの御助を求めると云ふ様にさへして居れば、「聖母は悪魔の近き得ない樓」であるから、決して敗を取る氣遣ひはないのである。然るに若しや用心の垣も結ひ廻はさず、我前から門を開いて敵を迎へ入れるとか、或は懶けて何も筒も打ちやらかして了ひ、心の葡萄園を耕もしないとか云ふ様にして居ては、如何なるだらう。神は忍耐強い御方に在すので、忍耐して／＼葡萄の實を結ぶのを俟ち下さる。然し一向耕さうともせず、何の手入れもしないので、雑草を我物顔に蔓らして置く、葡萄は根を耕し、枝端を切り取らなければ結實が悪いのに、慾の大技、我儘の小技を切り去らうもしないで

は、善の實一つ結ばう筈がない。然うなつては幾ら忍耐強い神には在しても、其まゝに放任し給ふ筈があらうか。

で、神は前の譬話を續けて、斯う曰うて居る、「我は良き葡萄の結ぶのを望み俟てり、然るに結びたるものは野葡萄なりき……然らば我は葡萄園の籬を取り去り、その喰ひ荒さるゝに托せ、其垣を毀ちて、その踏み荒さるゝに托せん。我之を荒して再び剪ることをせず、耕すことをせず、棘と藪とを生え出さしめん。又雲に命じて、その上に雨ふることなからしめん」(全ノ四以下)と。

靈魂もやはり其通りである。護りの籬ともなる良心が麻痺して了ひ、用心の石垣は取り散らされたら、靈魂は忽ち汚はしい邪慾の捕慮となり、感情は下劣になり、今まで身を慎み、信者の品格を保つべく務め、人に自づと敬意を拂はれるやうにと注意して居たものが、もう耻ぢも外聞もそちのけにして、品行を破り、罪惡に耽り、爲に世の人には侮り辱められ、鼻の先で冷笑はれ、足の

下に踏みにじられるやうになるのは無理もない次第であらう。

さうなると、終には樓まで取壊されて了ふ。今まで安全な避難所、堅固な樓なりし聖母マリアに對する信心は壊れて了ふ。この聖母に對する信心の樓の中に隠れて居ると、心は何とも知れぬ愉快に躍り、力強く覺えて、清く、氣高く見えるのであつたが、今やもう其樓を取壊されて了つたので、敵から推し掛けて來られても、何處に駈け込んで、誰に縋り様もないのである。

早や良心に何の耻ぢる所もなく、咎めも感じなくなる、信仰を失ひ、聖母を敬愛する心が無くなつて來た、即ち外を圍む石垣も、内を守る樓も取棄てられて了つたので、心の荷荷園は忽ち荒野原となり、たゞ棘を生ずるばかり、是れまでは善をなすのが樂みであつたのに、今はもう一の善も行はない、是れまでは神の爲に、聖母マリアの爲に、身を献げ、苦を堪へる毎に、心は言ひ知れぬ平和を覺えるのであつたのに、今はもう何一つ献げる所がない、心の眞の幸福

眞の平安と云ふことは味ふことすら出來ない。神には見限られて、惡魔や惡人やは勝手に出入する、邪慾の草は我物顔に蔓り昌へる、心は全く廢物になつて善の花を咲かせることも、徳の實を結ばせることも出來ないで、人にまで後指され、笑ひ殺されるやうになつて了ふのである。

(3) 終に神は雲に命じて雨を降らさしめ給はぬ、今までは神の聖籠を豊に蒙つただけけれども、夫れをよく活用かす所がなかつた、恩に背き、聖籠を無駄に費した、洗禮の時から今日まで蒙つた聖籠を數へて見るが可い、宗教上の教訓、聖會に行はれる色々の聖務、正しい道を踏み行ふ様にと云ふ有り難い勸告、立派な決心、屢拜領した秘蹟、殊にこのダウイドの塔の中に駈け込んで、安全に身を護つて戴き、敵の企謀を冷笑つて、難なく之を追拂ふこと出來た頃の愉快な月日を思つて見るが可い。是等の御恵を辱うしたにも拘らず、惡魔に誘かされ、罪惡に汚れ、神に背き、聖母マリアを離れたのだから、

到頭神にも聖母にも見限られて、今はもう聖籠の雨露を、戴くに堪へなくなつた。心は荒れに荒れて、悪魔の巢窟となり、とゞの詰りは永遠の苦罰に泣かなければならぬ運命に立至るのである。さうした悲境に陥らない爲に、平生から身を慎み心を戒めると共に、何の様なことがあつても、聖母マリアに頼り続けることを忘れず、何時も「ダウイドの塔、我等の爲に祈り給へ」と叫んで居なければならぬ。

(實例)第七回出現——二月二十三日、早朝から百五十名乃至二百名ばかりの人が洞穴には集つて居た。

暫くするとベルナデッタは、靜に群集の中を通り、洞穴の前に来て跪いた。コンタスをポケットから取出して深く敬禮をしたが、その有様たるや、ちやうど聖堂に入り、祭壇の前に身を屈める時の如く、しかも夫れが少の様子ぶつた態とらしい風もなく、感心するほど自然で、純朴であつた。

今やすべての視線はベルナデッタの顔に注がれた。彼女は熱心にコンタスを誦へて居る、時々目を擧げて嚴を眺め、洞穴、その入口、既に聖母が六回も顯れ給うた洞穴の入口等を搜ねて見るらしく思はれた。彼女の兩眼には火の如き望や、俟ち焦れの情や、思召に安するの姿やがありと讀まれた。昨日は楽しいく出現がなかつた。然し彼女は天に向つてそのことを苦説かなかつた。我身の賤しい、到底それに堪へないことを深く自覺して居たからである。

突然彼女の額はクワツと輝いて來た。光明と生命との反映でも受けたかの如く輝いて來た。その黒い眼はきら／＼と光り、その顔はセラフィン天使の如き表情を見せ、この世のものとも思はれぬ微笑が、靜にその童貞的唇に浮み出た。彼女は幸福に酔ひ、變容し、ちやうど内に強い焰が燃えて居て、それが透明體をすかして外に輝くかの如く見えた。彼女は美その物であるが、然しそれは天上界の美である、優雅その物であるが、然しそれは天史的優雅である。彼

女は一言も發しないが、然し彼女の態度、その顔面、その舉動等が皆雄辯に物語つて居る、その不動の姿勢までが、熱誠を傾けて禮拜せるケルビン天使を慰ばせるのであつた。

群集は全く捉はれて、魂消て、征服されて了つた。是まで口元に嘲弄の色を漾はして居た男子等も首を下げて、自分から帽を取り、深く敬禮した。この感心な、凱旋的實在を前にしては、如何に口さがなきものも、一言の惡酒落すら言ひ出し得ようはずはないのである。ペルナデツタは既にダウイドの塔たる聖母に守られ、その御徳に則つて、自らも一個の小さなダウイドの塔になつて居るので、誰しも其前に立つては、自ら頭を下げずに居られなかつたのである。

第十三日 象牙の塔

(1) —聖母は高い堅固なダウイドの塔に在して、我等を護り助けて、敵の害を遁れしめ給ふのである。然し高い、堅固な點から觀て、ダウイドの塔と仰がれ給ふ聖母も、その美しい、澤々しい方面からは、また象牙の塔とも崇められ給ふのである。聖母は一生の間、象牙の如く清く、白光りがして、而かも豎實くく在したが、終には天に迎へ取られ、神の御光を照り返して、名狀し難いほど美しく輝き給ふのである。

聖母の御心は如何に清く、澤々しく在したことであらうか。小さな罪の汚れ、微な不足の瑾すら見付らぬ、その美しさと來ては、到底塵の世の人とは思はれ給はぬ位、神は天使を御覽になつたが、其中にすら傲慢を見當り給うた、惡に馳らうとする忌々しき姿を突留め給うた。然るに聖母の御心を隈なくお捜しになつても、善に馳りたがる念の外には、完全の境に向つて進まうくと努める美しい志の外には、何一つ御目に留るものはなかつた。固より聖母と雖も

我（われ）と我身（わがみ）を顧（か）みりて、何（なに）うしても之（これ）に満足（まんぞく）し得（え）ず、完全（くわんぜん）にして缺（か）ける所（ところ）なき神（かみ）を目標（きくへう）として、始終（しじゆう）上（うへ）へ〜と志（こころざ）して進（すす）まれた。今日（けふ）は昨日（きのふ）より、明日（あす）は今日（けふ）より、いよ〜清（きよ）く美（うつく）しく照（て）り輝（かが）き、神（かみ）を愛（あい）し、人（ひと）を慈（いつく）しみ、神（かみ）の爲（ため）、世（よ）の爲（ため）、一（ひと）身（み）を抛（な）げつて盡（つく）さうと務（つと）められたに相違（さうゐ）ない。然（しか）し幾（いく）ら綿密（めんみつ）に良心（りやうしん）の隅（すみ）から隅（すみ）までお調（しら）べになつても、不足（ふそく）とか、過失（あやまち）とか云（い）ふものは、一つとして見（み）當（あた）り給（たま）はぬのであつた。

今（いま）我（われ）等（ら）の良心（りやうしん）を聖母（せいぼ）の良心（りやうしん）と突合（つ）せて見（み）たら如何（いかん）、聖母（せいぼ）は夢（ゆめ）にも己（おのれ）に満足（まんぞく）し給（たま）はなかつたのに、我（われ）等（ら）は十分（じふぶん）に満足（まんぞく）して居（ゐ）るではないか。平日（へいじつ）でもミサ聖祭（せいさい）に與（あ）つて居（ゐ）る、朝夕（あさゆふ）の祈禱（いのり）の外（ほか）にコンタス（contas）をも誦（よ）へて居（ゐ）る、時（とき）としては布施（ほどこし）もした、人（ひと）の不足（ふそく）も堪（こ）へてやつた、侮辱（おとしめ）も赦（ゆる）してやつたと云（い）ふ様なことでもあると、もう大變（たいへん）な善業（ぜんげふ）を働（はたら）いた、豪（えら）い聖人（せいじん）にでもなつた積（つ）りで、ホク〜と喜（よろこ）んで居（ゐ）る。でも少（すこ）しく注意（ちゆうい）して調（しら）べて見（み）るが可（よ）い、その善業（ぜんげふ）と云（い）ふのも、多（おほ）くは利己（りこ）

心（しん）や虚榮（きよえい）心の虫（むし）に啄（つ）まれて了（しま）ひ、主（しゅ）に獻（さ）ぐべき所（ところ）は、殆（ほとん）ど残（のこ）らないと云（い）ふ摠梅（あんばい）ではないだらうか。

たゞ我（われ）等（ら）が聖母（せいぼ）の御前（みまへ）に立（た）つても、耻（はづ）しからぬ思（おもひ）のせられたのは、洗禮（せんらい）を授（さづ）かつた當日（たうじつ）であつた。彼（か）の日（ひ）には罪（つみ）を悉（ことごと）く赦（ゆる）され、心（こころ）は聖籠（せいろう）の光（ひかり）に輝（かが）き渡（わた）つて居（ゐ）たので、その罪（つみ）のない清（きよ）さを見（み）せるが爲（ため）に、頭（あたま）には白（しろ）い被布（ウエール）を戴（いた）された彼日（かのひ）にこそ我（われ）等（ら）も象牙（ぞうげ）の如（ごと）く、清（きよ）くて、白（しろ）い光（ひかり）が射（さ）して居（ゐ）るのであつた。不幸（ふかう）にして、この象牙（ぞうげ）の清（きよ）さをば永（なが）く保持（たも）つて行（い）くこと能（あた）はず、忽（たち）ち眞黒（まっくろ）に汚（けが）して了（しま）つた。でも有（あ）り難（がた）いことには、痛悔（つうくわい）の涙川（なみだがは）に之（これ）を洗（あら）つて、その汚點（けがれ）を清（きよ）め、更（さら）に熱心（ねつしん）を籠（こ）めて、屢（しばしば）聖體（せいたい）を拜領（はいりやう）して居（ゐ）ると、次第（しだい）に洗禮（せんらい）當日（たうじつ）の澤々（つや）しさに返（かへ）ることが出来るのである。

(2) 象牙（ぞうげ）は清（きよ）く白（しろ）光（ひかり）のするばかりでなく、また實（じつ）に齒形（はかた）もつかないほど堅（かた）い質（しつ）を備（そな）へて居（ゐ）るので、殊（ことごと）更（さら）ら人（ひと）に珍重（ちんちゆう）がられる。聖母（せいぼ）も神（かみ）の聖籠（せいろう）に固（かた）めら

れて居給うたので、我等の如く忌々しい誘惑に悩まれ給ふことすら無かつた。實に聖母ばかりは難攻不落な堅城の如く、嚴然と突き立つて在るので、流石の悪魔でも之に攻撃の鋒先を突き付け得ないのであつた。既に原罪の汚なくやどされ給うたのであるから、また原罪の結果たる邪慾に揺られ給ふ筈もなく、道ならぬ慾望が胸底に燃え出すこともなければ、悪魔の坂を駆け下らうと心が駄々を捏る様な憂ひもなかつた。然し外からは随分と手痛い攻撃を受け給うた。殊にカルワリオの頂に於て、悪魔の打込んで來た鋒先と云つたら、夫れはく非常なもので、彼處では悪が善に向つて、死物狂ひに最後の決戦を試みたのである。サタンは、キリストと聖母とを味方に引付け得ないのを口惜しがり、教師等を勧め、民衆を煽動て、悪黨を勵まして、キリストを無理非道に責め苦しめ、併せて聖母をも堪ふべからざる悲痛の海に沈めたのである。然し一たびキリストが御死去あそばすや、日は暗み、地は震ひ、巖は破れ、神殿の幕は眞二

つに裂けた。それを見たサタンは、「是こそいよく世の救主であつたよ、夫れならば殺させない筈だつたに！」と連りに後悔したが、もう後の祭、忽ち己が勢力は打挫かれ、人類は自分の手よりもぎ取られた。怖ろしいやら、耻しいやら、何うしてもちつとして居られないで、到頭地獄の底へ逃げ込んで了つたが、聖母は相變らず御子の十字架の下に突つ立ち給うた。怖ろしい暴風雨に前後左右から襲ひ蒐られても、象牙の塔の如く微動だもし給はぬ、言ふべからざる悲哀の中にも、御子の勝利を祝し、その救世の大事業の首尾よく成げられたのを喜び給ふのであつた。

(3) —我等は聖母とは違ひ、原罪に汚れて生れ出たものである。なるほど洗禮によつてその原罪の汚點は洗ひ落され、聖寵の白衣は與へられたにせよ、原罪の結果までも取除いて戴くことは出来ないで、やはり夫れを背負つて居る。随つて智慧は暗んで、物事を識るにも大變骨が折れるばかりか、動もすると誤謬

の中へ滑り落ちる、心は善に向はずして、悪の方へばかり走り出さうとしてならぬ、目も耳も口も手足も、心の命令は一向聴かないで、各自の慾を逞うせんとばかり働いて止まない。洗禮の時に戴いた價貴き聖寵は、斯う云ふ脆い、壊れ易い器の中に貯へて居るのである。搗て加へて、外からは悪魔だの、世間だの云ふものが、力を合せてこの貴い寶物を奪ひ取らう、奪ひ取らうに掛つて居るので、油斷も隙もあつたものではない。少しでも注意を怠り、不用心な事でも遣り出したものなら、その千金にも代へ難い寶も、忽ち掻いさらはれて、何一つ残る所はないのである。

で我等は我身の脆弱さを飽まで承知して、何時も何處に於ても、注意の上には注意を加へ、何んな事があらうと、心の寶を奪ひ去られないやう、努めなければならぬ。然し幾ら用心ばかりして居ても、優勢なる敵に打突つたら、一堪りもなく潰れるのだから、特にこの象牙の塔たる聖母の御許に身を寄せて、之に護

つて戴くやうにするが肝要である。あゝ象牙の塔なる聖マリアよ、我等を護り助けて、敵の害を免れしめ給へ。アメン。

(實例)―第七回出現のつゞき―ル、ドの收税官にエストラドと云ふ人があつた。その姉の熱心な勧めをも顧みず、是まで一回だも洞穴へ行つて見ようとはしないのであつた。然るに二月二十二日、主任司祭ペラマール師を訪れ、談笑の序にその事を物語ると、ペラマール師は案外にも、「行つたつて差支ないぢやありませんか、私が貴下でしたら、きつと行きましたでせうよ」と御返答なすつたので、エストラドはそれに力を得、翌二十三日、姉の後に隨いて嘲笑を眼元に浮べつゝ、洞穴へ行つた。然しベルナデッタの變容せるその實況を見るやすつかり感服し、熱心にベルナデッタを見守つて居る。固より自分等の眼には出現の聖母は見えないが、然しその結果がはつきり分つて居る。無邪氣で、天真爛漫な、拵へたり、見せかけたりするなんて夢にも知らない少女の顔にそ

の結果があり／＼と映つて居るのである。さてベルナデツタは時々耳を欬て何かを聴き、それに答へるらしく、唇をも動かして居るが、然しその聲は聞えない、微笑んだり、首肯いたり、問うたり、顔面が喜びに輝くかと思へば、やがてまた悲みに沈み、不安の様を額に漾はしたりする。次で憫れを催し、嘆願し、身を謙つたが、再び微笑が戻り、顔は幸福と満足の表情に輝いた。彼女の願は聴かれたのである。

對話が終に近いた頃、ベルナデツタは跪いたまゝ野薔薇の下まで進み行き、慎んで地に接吻し、夫れから同じ様に跪いたまゝ、再び前の場所に歸り、目を擧げて最後に出現の聖母を眺めたが、その時聖母は消え失せ給うたと見え、彼女の姿はもとの貧しい小娘となつた。

何と姫君はお話しになつたかと問はれて、ベルナデツタは答へた、「實は三つの秘密をお告げ下さいました。然し夫は私一人に當ることで、聽罪師にで

も洩すことは出来ないであります」と。その秘密とは多分新な聖寵で、ベルナデツタを教育して、次第にその不足を去り、その徳を研き、歩一步理想の境に近かしめる爲のものであつたらうかと思はれる。實際この無學な少女はその熱心、その順良さ、その己が賤しさの深く自覺、かゝる大なる御恵にたいする心からなる感謝、賢者に隠され、小さきものに啓示される玄義を見る清い明るい眼によつて、靈生の道に造詣深い人や、博識な大家等よりも、天使等の眼には一層偉大にして感嘆すべきものであつたのである。

エストダル氏は感慨無量で、來た時の嘲笑は何時しか消え失せ、「私は夢見た様な心地で、案内をしてくれた婦人等を遺して置いたと云ふことすら思ひ付かないで、そのまま洞穴から歸つて來た、私は感動を靜めること出来なかつた」と物語るのであつた。

第十四日 象牙の塔 (其二)

(1) 聖母は一生の間、象牙の如く清く澤々しく在した。然し晩年に近く随つて、その御徳は、ますます圓熟し、その御心はいよいよ完全に進み、體こそ現世に在しても、心は早や御子の御側に舞ひ上つて居られた。平素から御胸は神の愛に燃え切れんばかりで、世の儂い財寶や快樂や、そんな事物には露ばかりも心を引かれ給はぬのであつたが、然し御子の御昇天後になると、その愛熱はいよいよ盛に燃え立つて来て、一日も早くこの涙の谷を去つて、光榮の御國へ到り、愛する御子に遭ひたいものと、一心に望み、神の思召に万事を托せ奉りながらも、只管その幸福の曉を待ち焦れさせ給ふのであつた。

終に聖母の熱い御望の達げられる時が來た。御子は數知れぬ天使聖人等

を率ひて、聖母の御許へお降りになつた。聖母は愛熱に燃え切れて、眠るが如く息絶えさせ給ひ、御靈魂は直に天國として昇られた。然し御肉體とても、原罪の汚に染まらずしてやどされ、九ヶ月の久しき間も神の御宿となり給うたのであれば、他の人も同様に、腐つて蛆虫の餌食となり給ふべき筈がない。間もなく御靈魂と合して甦り、そのまゝ天に昇り給うたのだ、と聖書にこそ記してないが、昔しから言傳へて、聖會一般にさう信じて居るのである。

聖母は既に天國へ昇られた。神は之を諸の天使聖人の上に擧げ、之に天の元後の冠を戴かせ、之を諸の天使聖人の上に据え置き給うた。天使等は齊しく聲を揃へて、その元後の光榮を歌ひ、併せて神の思召、聖母を天の元後に立て、世の人を残らず天國にお引取り下さらうと云ふ有り難いその思召をも祝し奉つた。

兎に角、聖母は天國に迎へられて、光榮の冠を戴き、天使聖人等からは、

天の元后と仰がれ給ひ、數々の美德を刻まれしこの象牙の塔は、奇しき天の御光を受けて、いよ／＼美しく照り輝き給ふに至つた。然し聖母が天の元后の高き位に擧げられ、美しい徳の光を輝かせる象牙の塔と歌はれ給ふことになつたのは、強ち原罪の汚なくやどされ給うたからではない、神の御母にて在したからでもない、その原罪の汚なき御身に釣合ふだけの功績を立てられたからである、その神の御母に應はしき徳を積まれたからである。神には偏頗がない、各自の功績により、徳に應じて、夫々に報い給ふのであるから、たとへ御自分の御母であらせられようと、若しその功績が尋常一様であつたら、何うしても尋常一様の褒賞しかお與へにならない筈である。

(2) —抑も聖母の御一生を貫けるものは愛であつた。愛は徳の極致である。心を盡し、力を盡して神を愛するに至らば、如何なる徳も行へぬことはない。然るに聖母は御誕生より御永眠まで、たゞ神を愛するが爲に生き給ふのであつ

た。熱く／＼神を愛し給ふ所からして、その聖意に戻ると思はれる様なことは一つも爲し給はぬ、却つて御望みになる事と見るや、何んなに辛い苦しい事でも、飛び立つて之を行つて退けられた。神の思召に従つて、三十年の久しき間もナザレトの貧しい家に、普通の婦人の如く、賤しい生活を送られた。神の思召に従つて、最愛の御獨子さへも快く犠牲に供へられた。神の思召に従つて、御子御昇天の後も幾久しくこの涙の谷にお留りになつた。

斯の如く聖母は寝ても起きて神を愛し、始終その思召を奉戴き、万事を神の爲に盡して行かれたから、一步御足を動かし給ふにせよ、一口物を言ふにせよ、そのお流しになる一雫の汗に至るまで、大なる功績となつた。で神は是等の功績を一々數へ上げて見給へば、諸の天使聖人等の功績を悉く一つに集めても、到底比較にもならぬ程であつたから、また之を諸の天使聖人等の上に取擧げて、天の元后と定め、その象牙の塔の光を天上天下に仰がしめ給うた

のである。

(3) —是に就て我等も篤と考へる所があらねばならぬ。我等は幸に基督信者である、神の愛兒、キリストの弟分にして載いて居る。然し夫れだけで、大丈夫、天國の報酬が得られるものと安心してはならぬ、神は位や身分に報い給ふのではなく、功績を賞し給ふのであるから、位がなくても、身分が卑しくても、功績さへあるならば、何んな御褒美でも戴ける。して其功績を立てるには、必ずしも人目を驚かす程の大きな事を爲ねばならぬのではない。聖母はナザレトにお暮しになる間は、賄をするやら、洗濯をするやら、裁縫をするやら、さう云ふ普通の婦人の爲る仕事を毎日く遣つて行きながら、彼の様な功績を續まれたのである。されば何人にしても、自分くの境遇、職業に應じて爲すべき筈の事は、如何なに辛くても、苦しくても、主に献げて、きちんと之を果して行く一方から、朝夕の祈禱やら、日曜日の勤行やらを怠らず、悔悛聖體の

秘蹟も成るべく屢々授かることにし、傍ら慈善業を勵み、布教に手傳ふと云ふ様にして行きさへすれば、思はず識らずの中に澤山の功績を積んで、天國に昇り、面りに神を仰視ると共に、亦この象牙の塔の輝きを打眺めて、永遠無窮に樂むことが出来るのである。

第八回出現——二月二十四日、ペルナデツタは同じ所に、同じ石の上に跪

いた。間もなく奪魂の境に入り、眼は据わり、額は輝き、顔と目は燃るが如く見えた。暫くすると彼女の顔は俄に曇り、非常に悲しい通知でも受けた人の様、甚く擾れ騒ぎ、熱い涙は連りに頬を傳うて流れた。

彼女は起ち上つた、然し見えざる大威嚴にでも壓倒されて居るかの如く、俯向いたまゝ進んで巖に近き、一足毎に平伏して地に接吻した。野薔薇の下に行くや、枝をかき分けて再び平伏し、それから立つて頭を擧げ、足を爪立て、何かを俟ち、耳を傾けて居る。

彼女は嚴の方を打眺めて居るので、その表情を見ることは出来なかつたが、背を振り向いた時、その悲しげな姿に痛み入らぬ人こそなかつた。顔は涙に潤ひ、飲泣しながら、「贖罪！贖罪！贖罪！」と叫んだ。必ず聖母の御唇より洩れ出たのを聽いて、それをくりかへしたものに相違ないのであつた。

是で神の御計畫はすつかり讀めた。ベルナデッタが有難い出現を幾度もく辱うしたのは、固より神がベルナデッタの深い謙遜、その清い童貞美を喜ばれ、無邪氣な天真爛漫な彼女に識られ、祝せられ、愛せられたく思召させ給うたからでもあらうが、然しその主要目的は民衆の改心を謀るに在つた、「罪人の爲に祈りなさい」と一個の尊い使命をお授けになつたのである。

そして悪魔は民衆を腐敗させる爲に、享樂の餌を以てし、あらゆる邪慾、快樂、利己、嫉妬、度なきの放縱を逞うせしめて居る。神の天秤には惡の皿がズン／＼下つて止る所を知らない、之に平衡を保たしめるには、片つ方の皿に十

分の重量を持つた苦行を置かなければならぬ。「贖罪！贖罪！贖罪！」と聖母がくりかへされたのは實に之が爲であつた。

我等も象牙の塔にて在す聖母に則り、身も心も清淨に保つと共に、亦世の人の罪惡を償ひ、彼等の心を清めて、次第に清い、白光せる彼の象牙の塔の如くならしめたいものであるが、それには先づ贖罪の必要、聖母がくりかへしてお叫びになつた贖罪の必要を認め、奮つて之を斷行しなければならぬのである。

第十五日 黄金の堂 (其一)

(1) 聖會は聖母を象牙の塔に譬へ、心から之を讚美した。然し象牙よりも一層美しく、價貴いのは黄金なので、今や一步を進めて聖母を黄金の堂と稱

し、聖母が神の御住ひになる、善を盡し、美を盡せる聖堂にて在すことを讃美し奉るのである。

思ふに我等の肉體にせよ、靈魂にせよ、始から神の聖堂に充てられたもので聖パウロはコリント前書中に「汝等は其身が神の聖殿なること、神の靈が汝等の中に住み給ふことを知らざるか」(コリント前)と云つて、身を清淨に取り守るべく勤めて居る。實際我等の肉體は神に造られ、洗禮の水に洗ひ清められ、辱くも聖靈の住み給ふ聖堂とまでして戴いたのであるから、務めてこの身を尊重し、假にも醜しい行爲などして、この聖堂を汚してはならぬのである。夫れに就ては、聖母が如何に其身を尊重し給うたかを思つて見るが可い。立振舞には何となく威嚴があつて、何處に於ても目を慎み、言を控へ、額には何時も童貞の光を輝かし給ふのであつた。その尊い御姿を仰視したものなら、誰しも我身の輕佻で、何の慎みも、取締もないのには自分ながら顔を赧めず居られまい。

一體我等の身は、我等のものゝ様で、實は我等のものでなく、神の所有である。世間が誘惑の手を伸して、さそひ出さうとする時は、何時でも「私 はもう私の有ではない、神様の有だから、勝手にはならないのだ」と答へて、其手を振切らねばならぬはずである。

我等の體はたゞ神の所有であるばかりか、忝くも聖靈の住み給ふ聖堂である。我等が我身の義務を全うし、家業に精出し、良書を読み、親の爲、妻子の爲、熱心に立働く間は、神も喜んで我等の身内に住み給ふのである。然し虚榮心に身を窶し、世間を浮れ廻はり、如何はしい人と往來し、家事を怠り、學業を勵まず、怪げな讀物に耽る様になると、忽ち神との縁が切れて了ふ、聖靈は已を得ずもその汚れ果てた家を出て行つて了はれる、聖母もまた涙を揮つて、その不幸なる迷兒に顔を背け給はねばならぬことになるのである。何が何うあつても、そんなに聖靈を悲ませ、聖母を泣かせ奉つては濟まない、

司祭が聖體を奉持け、行列の先頭に立つて進みながら、脇見をしたり、道行く人々と冗談を言つたり、巫戯け散らしたり、終には勿體なくも、その聖體を塵埃の中に投げ棄てたりするのを見たら、我等は何と言ふだらう、「瀆聖だ！瀆聖だ！」と叫んで、その司祭の浅ましい心根を憤慨せずには居られまい。然し聖靈を宿し奉つて居る身を持ちながら、世間を浮かれ廻つたり、良からぬ友に交つたり、不潔な讀物に心を破つたりする青年處女は、やはりその浅ましい司祭の類ではないだらうか。

(2) —我等の靈魂も神の爲に設けられた聖堂で、神は之に住ふのを樂とし給ふのであるが、然しこの靈魂の外側を一通りお見廻りになつたら、如何なる感じを覚えさせ給ふであらうか。用心と警戒の二徳が嚴重にその門を守備して居なければならぬのに、屢それをお留守にして何處へ行つたやら、影も形も見せない、門は開つ放しにして、如何なる思、望、言語、讀物でも勝手に出入り

して居る。「誘惑に入らざらん爲に醒めて祈れ」(マテオ)と御主の御注意があつたにも拘らず、我身の上に注意の眼を醒ることもせねば、祈禱と云つても、たゞ役目済ましに、定文句を繰返して居るばかりだから、靈魂は有ゆる誘惑の風雨に暴露れて、到底神の御住所に適したものではない。

中へ這入つて見ると、小罪の埃、大罪の芥が山を成して、其爲に信徳の床板は隠れて了つたかの様、望徳もまだ消え失せてこそ居ないが、餘りの耻しさに片隅に小くなつて居る。勇氣や、正義や節制やと云ふ様な柱も大分傾いて來た。やつと徳の屋根を支へて居るに過ぎない。

嘗て愛徳の黄金が、燦然と輝いて居た心の奥は如何なつたかと見るに、もう世俗の愛に全く占領されて了つた後のことで、そんなものが残らう筈はない、神の愛と世俗の愛とは兩立し能はぬ、神は我等の心を全く占領したいと思召し給ふのに、世俗もやはりこの心を占領したいとする。して今やその世俗に、主が

誼のりひの雨あめを浴あびせかけ給たまうた其世俗そのせきよくに、全幅ぜんぶくの愛あいを献さげて了しまつたので、神かみに献さげ
 る所ところは全く残のこらない。折角せつかく御入來ごじゆらいになつても座席ざせきと云いふは一つもない。邪慾ぢやよくを
 尊たふとんで居ゐる、快樂くわいらくを祀まつつて居ゐる、世俗せきよくを禮拜らいはいんで居ゐる、少しも神かみを顧かへりみない、
 神かみには締出しめだしを食くはして平氣へいきで居ゐる、神かみも己おのれを得えずそのまゝ立たち去さり給たまふより
 外ほかはない。

尤もつとも十人じゅうにんが十人じゅうにん、然さうなつて居ゐると云いふのではないが、然しかし如何いかなる靈魂れいこんで
 も、多少たせう小罪せうざいの埃まじりを被かつて居ゐる。良心りょうしんの窓まどは煤すすけて、神かみの御光みひかりを能よく通とほして
 れないので、愛あいの黄金こがねが十分に輝かがやかない、意向いこうも餘あまり正ただしくない、神かみの爲ために盡つく
 さうと云いふ中なかにも、幾分いくぶんか自分じぶんの名譽めいよや快樂くわいらくを狙ねらつて居ゐる。夫それでは何どうして
 神かみの御住宅おやすまとするに足たりるであらうか。

御主おんあるじは嘗かつて、エルザレム神殿しんでん内で商あきなをなし、その神聖しんせいさを潰つぶして居ゐる商人輩しやうじんばい
 をば鞭むちを振ふるつて逐おひ出だし、「我家わがいえは祈いのりの家いえと稱なへらるべしとあるに、汝等なんぢらは之これを

強盜かうたうの巢窟そうくつとなせり」(マテオ)とお叱しかりになつたことがある。我等われらの靈魂れいこんも
 神かみの聖堂せいだうとして戴いたして居ゐるのに、之これを祈いのりの家いえとせずして、恣ほしいままに邪慾ぢやよくを蔓はら
 せ、罪つみに汚けがさせ、惡魔あくままでも引張ひっり込こんで盜賊たうさくの巢窟そうくつとなしては、到底とうてい神かみが御滯おとど
 留とどり下くださる筈はずはない。せめて今いまからでも心こころを改かめ、痛悔つうくわいの鞭むちを振ふるつて惡魔あくまを追
 ひ出だし、邪慾ぢやよくを抑おさへ、罪つみを清よめて神かみの御住宅おんすまに適あはしく飾かり立たてよう。黄金こがねの
 堂だうにて在ます聖母せいぼの御鑑おんかんに則のつとり、我身わがみも一個いっごの小ちひさな黄金こがねの堂だうとなり、神かみが之これに
 住すむのを樂たのしみとし給たまふ迄までに至いたつたらば、扱あつて其時そのときこそ我等われらは如何いかに幸福きうふくであら
 うか。聖母せいぼもまた如何いかに喜よろこび給たまふであらうか。

(實例)——第九回出現——聖母せいぼは是これまでベルナデッタだけに顯あらはれ、たゞべ
 ルナデッタだけにお話はなしになつたが、第九回出現だいくわいしゆけんからは、事實じじつを以もつて一般はんに
 お話はなしを始はじめられた。

二月二十五日にふがつにじち、ベルナデッタは例れいの時間じかんに洞穴ほらあなへ行き、跪ひざまづいて祈いのりを始はじめた。

數分間黙想をした後、起つて洞穴に近き、坂を登り、野薔薇の枝をかき分けて更に進み、岩の眞下に行つて地に接吻した。夫から坂を降つて再び跪き、やがて平生の如く奪魂の境に入つた。

人々は深く沈黙して彼女を見守り、天使の如く變容せるその姿を飽かぬ思ひて打眺めて居る。

暫くすると少女は自分を呼ぶ聲に従ふが如く、再び起ち上つた。然しよく分らなかつた風で、ガヴ河さして行きかけたが、同じ聲に注意されたらしく、急に背向き、二三秒間、巖の方へ耳を傾けて聞いて居るらしかつた。やがて分つたと打らなづき、洞穴の左角へ向つて歩みを進めた。

路の四分の三も行つたかと思ふ頃、再び立止つて、周圍を見廻はし、捜して來たものは見當らない、當が外れたと云はんばかりに躊躇し、頭を擧げて聖母にたづねるらしかつた。

やがてベルナデッタは聖母の御命令により、身を屈め、指先きで小さな穴を穿つと、忽ち水が湧いて來た。彼女はその湧き出る泥水を暫し眺めて居たが、終にそれを掬つて飲み、顔を洗ひ、傍に生えて居る草を取つて之を食べた。

夫から以前の場所に歸りて跪いた。人々は彼女の顔が泥だらけになつて居るのを見て、「もう以前のベルナデッタでない、全く氣狂ひになつたよ」と同情と悲みとの餘りに叫んだ。彼等は一方ならぬ幻滅を覺えたのだが、出現に氣を奪はれて居るベルナデッタには、人々の聲も嘆息も一切聞えなかつた。

やがて誰かゞベルナデッタの顔を拭いてやると、彼女は唇に天使の如き微笑を浮べつゝ、天の異象を心行くまで打眺めるのであつた。

この日、彼女は長く七時までも祈つた。最後に聖母を打眺め、深い尊敬を以て、その美しい見事な十字架のしるしをなしてから自宅へ歸つた。

聖母はベルナデッタに常ならぬ恩恵を施し給ふのであつたから、先づ之に謙

遜な行爲を命じ、發狂したとまで人々に思はれしめ給うたのである。黄金の堂と輝くには、先づ謙遜の磨粉をつけて、之を磨き上げる必要があつたのである。

第十六日 黄金の堂 (其二)

(1) —我等の肉躰も靈魂も神の御住所にとて造られたものであるが、悲しい哉、まだ十分に神の御意を満足させ奉るまでに達して居ない。然るに聖母マリアは、身も心も清淨無垢で、一點の罪の汚點もなきのみならず、徳と云ふ徳は備らざるなしと云ふ鹽梅で、神の御住所には全く譏向であつた。
昔イスラエル王サロモンは、エルザレムに神殿を建立したが、夫れはノ、莊嚴華麗を極め、中に備へ付けてある契約の櫃にせよ、香壇にせよ、七の枝に岐れた燭臺でも、供へのパンを陳べる几案でも、總てが黄金づくめで、眩きまで

に輝き渡つて居たから、之を黄金の堂と呼んでも、決して溢美の言ではなかつたのである。

この神殿、世にも類なきこの黄金の堂こそ、正しく聖母マリアの象ではないだらうか。エルザレムの神殿は古今獨歩の智者と尊ばれしサロモンが、その脳味噌を絞つて設計し、無数の工夫を使役し、七年六ヶ月を費して漸く建て上げたのであつた。今聖母も全能の神がその驚くべき御智慧を傾けて、預め之を設計し、太祖等は之を熱心に俟望み、預言等等は之に就て預言し、その御誕生に際しては、天使は躍り喜び、人類は希望に胸を躍らし、悪魔は戦ひ慄いたのである。

サロモンが神殿を建てる時は、木でも石でも前以て寸法通りに切つて、削つて置いたから、建築中には槌の音も鑿の響も全く聞えなかつたと云ふが、聖母の御心も初から聖寵に強められ、善に固つて居られたから、悪魔が嘯いたり、

邪慾が怒鳴り出したり、忌々しい騒ぎを惹起したりする様なことは一つも無いのであつた。

(2)―聖堂の一番奥の間は至聖所と云ひ、其處には契約の櫃を安置してあつて、大司祭が一年に一回しか這入れぬのであつた。聖母の御胎もひとり神のみの住み給ふべき至聖所で、大司祭にして世の救主なるイエズスは、一たび此處へ入つて九ヶ月間も御宿り遊ばしたのである。

サロモンの神殿は總が黄金づくめであつた。聖母の御心も同じく愛徳の黄金に包まれ給うた。聖母の御心にもやはり黄金の香壇があつて、聖母は其上に汚なき童貞の美德を燻らして神に献げ給ふのであつた。徳と云ふ徳は何れも氣持よい香を放つものであるが、然し童貞の放つ香ばかりは全く譬へやうもない。昔ルフィナとセコンダと云ふ姉妹は、主の御教に従つて童貞を守り、爲に捕はれて眞暗な牢獄に打込まれた。獄卒等は非常に臭く、堪へ難い物を牢内に燃や

して二人を燻べ殺さうとした。然し神は二人の清い童貞を賞するが爲に、その煙をば、夫れはく言ひ様もない芳しい香と化して二人を喜ばせ、獄卒に膽を潰させなかつたと云ふことである。二聖女の童貞ですら其通りであつたとするならば、況して「童貞者の元后」と仰がれ給ふ聖母の童貞は、如何に燻しく香ふのであつたらうか。

猶、聖母の御心には供へのパンの几案もあつて、天より降り給ひし生けるパンたるイエズスが其上に供へられ給うた。終に聖母は七枝に分れた黄金の燭台の如く、聖靈の七の賜を豊に蒙つて、絶えず主の愛の火に燃立ち給ふのであつた。

聖堂の外庭には、犠牲を焼いて献げる爲に青銅の燔祭壇があつて、夫れには夜でも晝でも「燼えすの火」を燃やしてあつた。聖母も心の中は黄金の如く美しく輝き給うても、外面は貧しい大工の妻として、家事万端を司つて行かれ

た。荒くれた仕事もなし、青銅見た様に如何んな困難、辛苦でもちつと推し堪へ、その心中に絶えず燃え立つて居る愛の焔に、其等を焼き盡して之を神に献げ給うたのである。

(3)―我等の心も黄金の堂でありたきものである。たとひ聖母の如く、神の傑作ではあり得ないにもせよ、痛悔の槌、償の鑿が音を立てぬ譯には行かないにせよ、せめて心の奥の室には、神に宿つて戴きたいものではないか。愛の香壇も細かながら備へ付けて、その愛の火に清淨の徳を燦らすことが出来ないだらうか。我等の心にも供へのパンたるイエズス・キリストを置き奉るべき几案が設けてある。その几案を曇らしさへしなければ、主は喜んでお這入り下さる。聖女ゼルツルダは篤く聖體を愛して居たから、人は常に曰ふのであつた「たとひイエズスが天國にも、聖體の中にも在さないにせよ、ゼルツルダさんの心の中には屹つと居らつしやるよ」と、あゝ我等も然うなつたら、何んなに幸

あらうか。

我等は聖母の如く聖靈の賜を蒙つて居る。七枝の燭台を持つて居る譯であるから、成るべく其賜を應用して、キリストの勇敢なる兵士とならなければならぬ。

終に我等は心に愛の火を燃やして置き、夫れに日々之苦勞艱難を焼いて神に献げ奉りたい。たゞ是等の犠牲を焼くには、主の愛の火を以てせねばならぬ。さもなければ、ア、ロンの二子ナダブとアビウの様な目に遭はぬにも限らない。彼の二人は他から取り來つた火を香爐に入れて、香を燻らさうとするや、忽ち天罰を蒙つて焼き殺された。今我等の心には如何なる火が燃えて居るだらうか。神の清い愛の火か、良からぬ肉愛の火ではないか、万一汚れ果てた邪慾の焔でも燃え立つて居るならば、夫れこそ地獄の薪となるの用意をし置く様なもの、夢々さう云ふ間違つたことをしてはならぬ。

兎に角、我等の心は聖母の御心の如くであらねばならぬ。聖母の如く清い思
 を抱き、美しい望を貯へ、たゞ一心に神を愛し、又神の爲に人をも愛し、粕も
 挟雑物もない、純粹な愛に燃え立つべく務めたい。さすれば必ずまた光り輝け
 る黄金の堂となり、主もまた喜んでこゝに御住ひ下さるのは言ふを俟たざる所
 であらう。

(實例)——ベルナデッタが草を喰ひ、泥水を飲み、それに顔を洗ふなど、
 常ならぬ舉動に出たのを見て、多くの人は、彼女が氣狂ひになつたと思ひ、少
 からぬ幻滅を感じたが、然し二三の婦人等は別段躓かされる所もなく、ベルナ
 デッタが歸つた後もなほ居残つてコンタスを誦へ、誦へ終つてから、先程ベル
 ナデッタが顔を洗つた處へ行つて見ると、彼女の手で掘つた處から湧き出た水
 が、絲條ほどの流をなし、乾いた砂を潤し、除々とガウ河の方へ流れて居るの
 を見た。翌日になるとだん／＼水量を増して指大となり、それから七十餘年の

今日まで滾々と湧き、不治の病と思はれし中風、肺結核、嘔、盲、骨折等がこ
 の水によつて癒されたことは數ふるに違ないのである。

最初ベルナデッタを以て氣狂ひになつたなと思つた人々も、この泉と、これ
 により續々と行はれし奇蹟とを見て、一切の疑念を拂ひ去り、ベルナデッタの
 言ふ所に耳を傾け、出現の姫君が聖母マリアに相違ないことを信ずるに至つ
 た。

我等も聖母の如く黄金の堂とならなければならぬが、それには先づ心の病を
 癒され、汚を取り去る必要がある。心の病を癒され、汚を取去るには、ベルナ
 デッタの如く、深く謙遜した上で、聖母の指示し給へる秘蹟の靈泉に浴するこ
 とを忘れてはならぬのである。

第十七日 契約の櫃 (其一)

(1) — 黄金の堂はダヴィドの町なるエルザレムに建てられ、その黄金の堂の奥の間には契約の櫃が安置してあつた。今聖母もダヴィドの塔、黄金の堂にて在す以上は、また契約の櫃でもあらせ給はねばならぬ。

抑も契約の櫃とは何ぞと云ふに、十誠を刻んだ二枚の石板と、イスラエル人が四十年の間、曠野で食したマンナとを入れ置く爲に、神がモイゼに命じて作らせ給うた一個の櫃で、後では枯木に花が咲き、實の結つたと云ふア、ロンの杖をも夫れに納めてあつた。是が何處から見ても、しつくり聖母マリアに當つて居るのである。

先づ契約の櫃は腐敗を知らぬ合歡木の板を以て造つたものであるが、聖母も

原罪の汚なくやどされ給うた丈けあつて、傲慢や、虚榮や、嫉妬や、邪淫や、其他如何なる罪惡の萌をも感じ給はぬ、一生涯、一の小さな罪すら犯し給はず、罪に曳かれる心さへもなく、其靈魂は何時も清く美しく照り輝き給ふのであつた。

聖母の御靈魂の清さは、溢れて御肉體にも及び、御死去の後に至つても、我等の肉體とは異つて、全く腐敗を見なかつた。豫言者はイエズスの御肉體に就て「聖なる者に腐敗を見せ給ふことなかるべし」(一五ノ一〇)と曰つたが、聖母もイエズスを容れ奉れる生きた聖櫃に在したから、同じく腐敗を知り給はぬ口傳によると、御死去後三日目に、イエズスは數多の天使等を従へて降り來り、聖母の御肉體をばその御靈魂に合せて、復活せしめ給うたと云ふことである。

(2) — 契約の櫃は、内も外もすべて純金を張り詰めてあつた。聖母の御心も

同じく純粹な神の愛の黄金を張り詰めたもので、内は固より清い／＼神の愛に燃え立ち給うたが、その熱烈さの度は如何許りであつたか、到底測り知られぬのであつた。然し外側の愛、人に對し給ふその美しい愛だと、伺はれぬこともない。ペトレヘムで宿も貸されず、非常にお困りになつた時でも、あたふたとエジプトへ落ち行き給うた時でも、その愛は純金の如く少しも曇る所がない。御子の十字架の下に於てすら眩かす、口説かず、人を怨みず、鬼の如き悪黨をすら心から愛し給うた。御胸は千万無量の苦痛に破られながらも、其愛は黄金の如く少しも變色する所なしであつた。

契約の櫃の蓋は同じく純金で出来、その兩端には二位のケルビン天使が向ひ合つて中央を見詰め、翼を擴げて夫を掩うて居た。神はこの蓋を玉座として、其所から人に聖旨を傳へたり、民の嘆願を聽いたり、罪を赦したりし給ふのであつたから、之を「贖罪所」と呼び做したものである。

聖母マリアがやはり神の御安息み遊ばす「贖罪所」で、神は聖母に宿り、その御胎に人となつて、其所から我等を指導き、御旨を傳へ、我等の願を聞き容れ、罪を贖ひ下さつたのである。

契約の櫃には十誠を刻んだ二枚の石板、マンナ、ア、ロンの杖等を收めてあつた。聖母の御胎内には、その十誠を與へた神が御宿り遊ばした。イスラエル人が四十年間、食物とせしマンナを以て象られ給へる聖體、我等が此世の曠野を渡つて、無事約束の地たる天國へ辿り着くまで、食べて行かねばならぬ主の御體、御血が其處に作られ給うたのである。終にア、ロンの杖、ア、ロンが神に選ばれた大司祭であると云ふ證據に、枯木が急に芽を吹き、花を付け、實を結んだと云ふ不思議な杖も置いてあつた。この杖こそ實にキリストの象で、聖書にも主は「ゼツセの根から生え出し枝」と呼ばれ給ひ、その幼年時代は若葉の萌え出た枝、青年時代は其枝に花が咲き溢れた時で、成人となり、十字架に磔

けられ、御血を流して人類を贖ひ給うたのは、即ち枝が立派に實を結んだのであつた。

(3) — 斯の如く聖母は何處から見ても、契約の櫃であらせられるが、我等も之に倣つて、一個の小さい契約の櫃になりたいものである。我等も洗禮を授かり堅振を受けて、主の御誠を心に刻んで戴いた。天のマンナたる聖體をも幾度となく拜領して居る。ア、ロンの杖見たやうに、原罪の爲に死んで居た我等の靈魂も、洗禮によつて生き返つた。たとひ夫からも幾回となく罪を犯して枯死するやうな目に遭つても、痛悔の涙に之を濕すと、何時しか聖寵の芽を吹き出して、善の花を咲かせ、徳の實を生らせることも出来るのである。

斯の如く我等は小さいながらも一個の契約の櫃であるから、始終我と我身の上うへに注意して、夫れが大罪にも小罪にも朽腐らない様、努めなければならぬ。其爲には傲慢を戒め、虚榮心を制へ、良からぬ讀物、不潔な友を避けるのが何よりも肝要である。然うした上で、内も外も愛徳の黄金を一杯張り詰めて置くことにしよう。内には熱く、主を愛して、信心の黄金を何時も曇らさない様に、外には深く人を愛し、慈善業を勵み、身を盡して人を教へ導き、勞り、慰め、過失を堪へ、侮辱を赦し、以てその愛の黄金が何時になつても、如何なる場合に臨んでも、ピカ／＼と輝き、少しも變色しないやうに努めたいものである。

終に我身は成聖の聖寵に輝いて「贖罪所」の如くなり、天使等は平伏して我等の内うちに在す神を拜禮し給ふと云ふ位。だから平素より言語、動作を慎み、人が我等の言を聴き、我等の行動を見ればかりで、自づと夫に感化され、眞の道に入り、以て神の御旨をさとり、罪を悔い悛めて、その御赦を蒙るに至ると云ふやうにならなければならぬ。

(實例) — 第十回出現 — 二月十六日ベルナデッタは洞穴に參詣し、眞直

に坂を登り、昨日指尖で掘つた泉に至り、身に大きな十字架を描いて、深く頭を下げ、水を飲み、顔を洗ひ、前垂の端でその顔を拭き、それから例の處に跪いた。

やがて出現を見、恍惚として身動もせず、巖の一方を打眺めて一心にロザリオを誦へて居たが、俄に祈を止め、耳を欬てた、「罪人の爲に地を接吻せよ」と姫君が命じ給うたので、彼女は頭をうな垂れ、兩眼に涙を湛へつゝ唇をつけて土を接吻した。

ベルナデツタは既に「罪人の爲に祈れ」と命ぜられ、「贖罪！贖罪！贖罪！」と三回までくりかへされ、今やその贖罪の手段として地を接吻し、深く謙遜する様に教へられたのである。

彼女は姫君の命を果した上で、膝行りながら野薔薇の枝の懸れる處に行き、立つて群衆を顧み、右手の食指を唇につけ、左手は下を指して、土に接吻

する様にと勧めた。それが姫君の仰であつたと見え、すべての膝は屈まり、すべての頭はうなだれ、すべての唇は土を接吻した。

我等は皆一個の小さな契約の櫃であらねばならぬ。然し我等は聖母とは異り、罪に腐り易く、心の純金は曇り勝ちで、絶えず警戒を嚴にすると共に、犯した罪は痛悔し、苦行の研きをかけて、その曇を取去り、然る後、人にまで勧めて苦行の道に入らしめ、以てそれらに契約の櫃たらしむべく務めなければならぬのである。

第十八日 契約の櫃 (其二)

(1) 契約の櫃は、舊約時代に於て宗教上最も尊貴い物を藏めてあり、神もまた之に由つてその聖旨を傳へ、その御威力を顯はし給ふのであつた。随つ

てイスラエル人は非常に之を尊重したもので、司祭の外には之を見ることも、之に手を觸れることも許されない。少しでも不敬を加へる様なことがあると、立ちに厳しい所罰を蒙るのであつた。ベツサメスの人々は物好きに之を覗いたが爲に、幾十人と即死した。オザは之に手を觸れたばかりで、忽ち其場に倒れて死んだ。ダヴィドは契約の櫃をエルザレムのシオン山に移す時、王の衣を脱ぎすて、豎琴を執り、歌ひつ舞ひつして大に喜んだ。妃のミコルは夫れを喜ばず「何ですか彼の態は、王様の御威光は何處にあるのです？」と咎めた。ミコルは其爲に、神の御詛を蒙り、子女を擧げること出来なかつたのに、ダヴィドは却つて色々と主の祝福を忝らした。

ダヴィドの子のサロモンはこの契約の櫃を收めるが爲め、莊嚴なる神殿をエルザレムに建てた。其が落成し、いよ／＼契約の櫃をその神殿内に移すと云ふ時全國の民を集め、盛大な行列を成し、牛や羊を數知れぬほど屠つて犠牲に献

げた。犠牲の血は川を成し、焼香の煙に空は曇り、讚美の歌、喜悅の聲に神殿の内外は鳴りどよめくのであつた。

(2) 聖母マリアも昔の契約の櫃に劣らぬ尊敬を受けさせ給ふのである。既に御誕生に際しても、天使等は救世の曙が顯はれ出たのを喜んで、その搖籃を取り圍み、伏して敬ひ尊んだではあるまいか。況してエルザレムの神殿に御身を献げ給うた時は、驚きの餘りに「あゝ此の月の如く美しく、星の如く清く勢揃せし軍隊の如く怖るべきものは誰でせう」(雅歌)と喜んでに相違ない。大天使ガブリエルは聖母の御前に顯れて、「聖寵充滿てる御者」と稱へて恭しく敬禮した。エリザベトは「女の中にて祝せられたり」と叫んで之を讚め上げた。ダヴィドが契約の櫃の前で喜び躍つたが如く、洗者ヨハネは母胎に在りながら、聖母を見るや飛び上つて喜んだ。

ベトレヘムに於て牧童でも、博士等でも、救世主を伏し拜んだ上では、また聖

母をも尊び敬つた。主の御昇天後、使徒等を始め、信者等は深く聖母を敬ひ、喜んでその御教訓を仰ぎ、万事その御指導に従ふのであつた。

契約の櫃は長らく天幕の中に安置してあつたが、後エルザレムの神殿内に移された。聖母も長らく現世に明し暮し給うた上で、諸の天使、聖人等の喜ばしき凱歌の中に天國へ迎へ取られ、天の元后の位に据ゑられ、光榮の冠を戴させ給うた。聖會は年一年とますく聖母の御徳を讃め、其光榮を歌ひ、その御譽を稱へ上げるやうになつて居る。

(3) —ダヴィドが契約の櫃を尊敬した爲に神に祝せられ、大なる恩恵を賜はつた如く、今でも聖母を尊敬し、その御名を譽め上げる人は、やはり神に祝せられ、有難い御恵を忝うするのである。之に反してミコルは、ダヴィドの態度を嘲弄つた爲に神に詛はれ、オザやベツサメス人等は、契約の櫃に對して尊敬を缺いた爲に怖ろしい天罰を蒙つた。聖母に對しても尊敬を缺くやら聖母を

尊敬するのを耻ぢるやら、嘲弄るやらすると必ず神に詛はれる。神は御母に加へられた侮辱をば御自分に仕向けられたかの如く思召し給ふのである。ネストリウスは聖母を神の御母でない、と主張した罰で、其舌は腐り、蛆に喰はれて死んだ。東ローマ皇帝コンスタンチヌス、コプロニスは聖母の御繪を尊敬する事を嚴禁した爲に、腹の中が焼けて焦死をした。

たとひ面りにさうしたえらい目に遭はなくとも、聖母を尊敬しないやうになると、其罰で信仰までも失ふに至るものである。見よ、異端者は常に聖母マリアを好まない、聖母マリアを好まないから、いよく誤謬の深淵へ落ち込んで行くのである。アリウスはキリストを以て眞の神でない、一個の被造物たるに過ぎない、と主張したのだから、夫れと共に聖母が神の御母にて在すことを否定した譯である。ネストリウスは、キリストが神と人との二のペルソナの持主で、人のペルソナだけが聖母から生れ給うたのだ、聖母は決して神の御母で

はないと頑張つた。プロテスタントになると、夫れ所の話ではない、ルツターでもカルヴインでも、エリザベスでも、聖母を尊敬するのは忌々しい迷信だ、ローマ教會では聖母を禮拜んで居るのだ、惡むべき偶像崇拜に陥つて居るのだ等と惡口を吐き散したものである。今日のプロテスタント信者は、皆彼等の流を汲んで居る、中には眞面目な人も少くは無いのだけれども、始終くりかへし其様な事を聞かされるので、終には公教會を以て迷信の巢窟だと信じ込み厭がつて近かうとはしないのである。惡魔はその傲慢な頭を聖母の御足に踏み碎かれるのが怖ろしいので、斯うした嘘八百を陳べ立て、人の心を迷はし、眞の信仰に入らせまいと働いて居るのである。随つてプロテスタントから公教に歸正つた人は殊更ら熱心に聖體と聖母とを尊敬するものださうである。

或る英國人は公教會に歸正つた上で、助祭となつた。一日聖體を顯示臺に入れ奉らうと、恭しく手に取りは取つたが、何時までも其儘打眺めて居た

ので、「如何したんです」と後で人が問うたら、「あゝ私等は餘りにも長く聖體の斷食をして居ました、餘りにも久しく聖母の斷食をして居ましたから、私等の目も心も之が前に立ちますと、何時になつても離れ得ないのです、飽くことを知らないのです」と答へたさうである。

我等は幸に聖母を知り、聖母の尊敬すべき所以をも分つて居る。是ばかりは一方ならぬ主の御恵で、幾ら感謝しても感謝しても足りないものである。然し我國には未だ聖母を知らない異端、異教の人々ばかり。知つても之を尊敬しない公教信者さへ少くはない、我等はさうした人々に代つて、殊更ら篤くこの契約の櫃なる聖母を尊び愛したい、聲を限りにその御光榮を歌ひ囃したい、我等の祈の聲、讚美の歌を以て彼等が惡罵の叫びを、臆病者の聲を打消して、聖母の御耳には届かせない様に務めたいものである。

(實例)―第十一回出現―二月二十七日は土曜日で、この日にベルナデ

ツタは常よりも長く祈り、出現の姫君と親しく物語つた。物語つて居る中に姫君は突然その話を中止し、恰當重大な取極めでもなさうと考へて居る人の如く口を噤んで暫く氣を取静めた上、「こゝに一軒の小聖堂を建てる様、司祭等に傳へなさい」と仰せになつた。

この仰を承つたベルナデツタは、少からず胸を騒がせた。司祭等に傳へるとすれば、主任司祭ベラマル師に申出ねばならぬ。所でベラマル師と云へば、冷静で、嚴格で、一寸近き難い人である。姫君の優しい、温和なのに思ひ比べると、今度の傳言がいよゝゝ以て六ヶしさうに思はれてならぬ。

然し姫君の御命令はそのまゝに措て置く譯には行かない。ベルナデツタは怯々と教會を訪れ、ベラマル師に面談して姫君の希望を申上げた。ベラマル師はわざと嚴格に、暴々しい語調で、彼女に應對し、出現に關する一伍一什を問ひ糺し、ベルナデツタが少しの淀みもなく、自然に、謙遜に、スラ／＼と委細殘

らず物語るのを聞いて、心中大に感じ、是が無學な一少女の話振りと思はれようか、是は必ず自ら聖母を見て、その聖母から親しく超自然的教育を受けたに相違ないと信じた。然しまだ意見を發表すべき時でないと思ひ、「ル、ドの司祭は名も知らぬ人の相談に應じ兼ねるから、先づ名前を知らせて、その名前が確に自分の名前であると証明して戴きたい、とその婦人に言つて下さい」と答へてベルナデツタを歸した。契約の櫃なる聖母マリアを心から尊敬する人は、何時とはなしに聖母の御訓導を蒙り、物の言ひ様、身の振舞に至るまで自ら違つて来る。ベルナデツタを見ても知られるであらう。

第十九日 契約の櫃 (其三)

(1) —ダヴィドは契約の櫃を奉じて、戦に出る時、「卿はくは主起き給へ、

その敵は悉く散り、神を憎む者は御前より逃げ去らんことを(詩六七ノ二)と歌つたが、實にこの契約の櫃の威力は驚くばかりで、イスラエル人は之に由つて毎々主の御助を蒙るのであつた。彼等がエジプトを出てから早や四十年、いよ／＼カナアンの地に這入らんものと國境まで押寄せて見ると、其處にはヨルダンの大河が横つて居る。時しも上流の山々から落ちて來る雪融けの水が滔々と早瀬をなして流れて居るので、到底徒渉など出来る話ではない。然るに大將ヨズエは司祭等に命じ、契約の櫃を擔いで直先に進ませた。すると不思議にも河上の水はビタリと止つて、一雫も流れない、反對に河下のはトロ／＼と流れて下つて、跡には廣い立派な道を遺した。イスラエルの民は足をも濡らさずに、この大きな河を涉ることが出来た。

河を涉りは涉つたが、直ぐ其前には要害堅固なエリコ城が突立つて居る。カナアンを征服するには先づこの城から落して掛らねばならぬ。然しイスラエル

人は城攻めの機械は疎か、普通の武器すら持つて居ない。けれどもヨズエは狼狽へず、騒がず、司祭等に命じて、契約の櫃を擔がせ、民の先頭に立つて、毎日城の周圍を廻らせた。七日目には、同じ様に七度もグル／＼廻らせ、最後に司祭の吹き散らす喇叭を合圖に、民に齊しく聲を揃へて、ワア、ワツと鬨聲を擧げさせた。すると金城鐵壁と歌はれしエリコ城も忽ち瓦落／＼と崩れ倒れて、難なくイスラエル人の手に落ちた。

我等も約束の地たる天國を指して進んで居るのであるが、途中には滔々と早瀬をなして流れる邪慾の河も涉らねばならぬ。悪魔や世間が頑丈に構へて居る種々の城壁も蹴破つて進まねばならぬ。しかも我等には其流を横ぎる用意もなければ、其城を攻め落す爲の道具もない。さらばとて其河を涉らず、其城を落さずしては、天國へ這入れない、何うしたものだらう。神は出来ない事を命じ給ふ筈があらうか。否、前を望むと、司祭は神の仰に従ひ、契約の櫃を擔いで

先頭に立つて居る。その司祭の導くまゝに、聖母マリアを心から敬ひ愛し、御保護に深く頼り縋つたら、何一つ怖れる所はない。たとひ行手には災難の早瀬が横つて居ようと、邪慾が怖ろしい渦を巻いて流れて居ようと、たとひ悪魔や世間が如何に堅固な城壁を築き立て、居るにしても、氣遣ひするには及ばぬ一たび聖母の御名を呼び、その御扶助を求めさへすれば、悪流はピタリと止り、罪の城壁は瓦落くと壊れ落ちるばかりである。

(2) 聖母は契約の櫃で、この契約の櫃には如何なる悪魔も立向ひ得ない、夫れは少しも疑を容れざる所である。さらばとて一生の間、罪惡の中に溺れて居ても、死ぬ時に聖母の御名を呼んで、その御助力を求めさへしたら救はれぬことはない、自分勝手な算断をして、邪慾を擅にして居ては、危険の上なしである。フィリスチン人と戦ひ、惨め極まる敗北をしたイスラエル人の例を見ても明であらう。

彼等は神を忘れ、偶像を拜み、散々に惡事を働いて居ながら、契約の櫃さへあらば決して敵に負ける氣遣ひなしと思つて、夫れを陣中に迎へ取り、天地も揺がんばかりに歡呼の聲を擧げた。然れども夫れはホンの糖喜びで、もう神に見放されて了つて居る彼等だ、契約の櫃ばかりあつた所で、何の役に立つであらう。翌日敵と鋒尖を交へると、案に相違して非常な大敗北を蒙り、討たるゝもの三万人、契約の櫃までも敵の手に落ちて了つた。

然し敵の手に落ちても契約の櫃の威力が決して無くなつた譯ではない。敵は今度の大勝利を以て國の神ダゴンの威徳に由るのだと思ひ、其ダゴンの像の前に契約の櫃を据ゑ置いた。然るに翌朝行つて見ると、ダゴンは契約の櫃の前に俯伏に倒れて居る。不思議に思つて之を抱へ起し、元々通りに立て置いた。翌朝再び行つて見ると、ダゴンは又復打倒され、首と兩手はちぎれ、胴ばかりになつて床板の上に抛げ出されて居るではないか。

(3) —ダゴンは悪魔の象である。我等も神に背き、罪を犯すと、悪魔が心の中に這入つて来て、我物顔に之を占領して了ふ。さうなつても万一聖母マリアを忘れず、コンタスを爪繰るとか、聖母のメダイを首に掛けて居るとかして、之に頼り縋る心だにあらば、未だ契約の櫃を全然放り出して居るのではない、謂はゞ夫をダゴンの前に据ゑ置いて居るやうなものである。所で聖母は何時までも我等を悪魔の虜となして、棄て置き給ふものではない。必ずや我等に痛悔の心を起させ、告白場に跪かして下さる。然うなると、悪魔は聖母の御前に俯伏しに倒れたのだ。倒れても其まゝ黙つては居るまい。悪しい友、罪の機會などを備ひ、何うにかして手離すまい、何時までも虜にして置かうと願ふであらう。然し我等が猶も熱心に聖母の御助力を求めて止まなかつたら、聖母はきつと彼の頭を捻ぢ切つて、悪い企を起し得なくなし、彼の両手とも謂ふべきその悪友や、罪の機會をも遠けて、全く何うすることも出来なくして下さるに相違ない。

兎に角、現世は戦の場、我等の前後左右は敵ばかりで、夜でも晝でも絶えず攻撃を加へられるのだから、油断も隙もあつたものではない。然し怖れるには及ばぬ。イスラエル人に倣ひ、契約の櫃を擔いで進み戦つたら、決して負を取らぬ。取らぬ氣遣ひはない。たとひ一度は負けても、直に立ち上つて敵を軒り伏せ、一層鮮な勝利を得ることが出来る。であるから今よりは、進んで敵を攻撃するにせよ、退いて身を守るにせよ、常々深く聖母に頼り縋り、「契約の櫃なる聖母、我等の爲に祈り給へ」と呼ぶことにしなければならぬ。聖母は何時でも何處に於ても、我等を助け、勵まし、力を添へ給ふので、その御助に縋らば、すべてのダゴンは、すべての偶像は、すべての悪魔勢は倒れて、我等の前にへたばるのみであらう。

(實例) —第十二回出現——二月二十八日は、日曜日でベルナデッタは早

朝から洞窟へ行つた。見物の群衆は早や二千人の多きに上つて居たが、ベルナデッタは側目も振らずに群衆の中を通つて、何時もの處に跪き、ポケットからコンタスを取り出して祈を始めた。間もなく彼女は恍惚となり、顔は天來の光に照り榮え、見物人の目には、彼女自身が出現の異象の如く仰がれた。

彼女が巖の上を眺め、姫君と物語る間、四隣は森として、物音一つ聞えず、何れも心の中に祈り、我知らず彼女の爲す所に倣ひ、彼女がコンタスを爪繰れば自分等も共に爪繰り、頭を垂るれば、共に頭を垂れ、地に接吻すれば、また共に接吻するのであつた。

岩の上からこの様子を見て居たエスドラド氏の述懐に曰はく

「この日の見物人は皆陶然として酔へるが如く、荒熊の様な男が子供みた様に泣いたり、朴訥な百姓が思はず両手に力を籠めて、折れよとばかりにその杖を曲げたり、町の一職工は胸中に漲れるその感動を漏らすが爲に、言葉の

ありたけを低聲でくりかへし、一人の紳士は全く忘れて居た祈の文句を思ひ出さうと務めるのであつた」と。

姫君はベルナデッタに「罪人の爲に祈れ」と命じ給うた。ベルナデッタはその命に應じて祈つた。して罪人は神の聖寵に感じて自ら反省し、自ら祈り、そろ／＼改心の實を結ぶに至るのであつた。

この日始めて驚くべき奇蹟が、洞窟の水によつて行はれた。ル、ドの町にルイ・ブリエツトと云ふ石工が居た。二十年前に石を割る爲の火薬が爆發して、顔を傷け、右の眼は岩の破片に潰されて、全く見えなくなり、辛うじて命だけを取り留めることが出来た。

然るにルイはこの頃評判の高いマツサビエルの洞窟に湧き出た泉の話聞き、一日自分の娘に、「お前は洞窟に行つて、その泉の水を汲んでお出よ、もし御現れの姫君が聖母でしたら、私を憐んで、きつとこの眼を癒して下さるか

ら」と曰つた。

娘は命ぜられたまゝ洞窟に行き、泉の水を壘に汲んで来た、「お父様、泉の水は大變濁つてますの、本當な泥水よ」と云つて差出すと、ルイは早速その水を取つて見えない右の眼にこすりつけたが、劇しく慄き、思はず頓狂な聲を出して、「見えるよ、見えるよ」と叫んだ。思ひがけもなく太陽の光が目に入つたのである。彼は感極つて有難涙に咽んだ。

一兩日の後、彼は自分の係醫師ドズス氏に途で遭つたので、聖母のお蔭で自分の眼が癒つたことを話した。ドズス氏はそれを信ぜず、衣囊から手帳を取り出し、鉛筆で細かい文字を書き、ルイの左の眼を掩うて右の眼の前に手帳を示して、「是が讀めるか」と云へば、ルイは早速「ブリエツトの眼は黒内障であるから、決して癒るものではない」と讀んだ。ドズス氏は百雷が一時に足元に落ちたよりも驚いた「是は眞實の奇蹟だ、全く神の力だ、私はさう堅く信ずる」と

曰つた。人をして契約の櫃たる聖母に信賴する氣にならしめる爲め、神は物質的惠をも施し給うたのである。

第二十 日 契約の櫃 (其四)

(1) —イスラエル國民は契約の櫃に導かれて、四十年の間もアラビアの沙漠を旅行した。いよ／＼カナアンの地に攻め入り、之を征服するに當つても、始終契約の櫃に助けられ、それに由つて敵を打破り、鮮な勝利を博することが出来た。

今聖母は契約の櫃である、たゞ我等一人づゝの爲に契約の櫃となつて、我等を助け、護り、強めて下さるばかりではなく、また已に信賴む國民や教會をも特に保護して下さるのである。

考へて見ると聖母マリアと我日本公教會とは初から餘ほど密接な關係があつたものである。先づ一五三四年に聖イグナチオがゼズイト會を組織して、聖フランシスコ等七名の會員と、巴里のモン・マルツル聖堂で最初の誓願を立てたのは八月十五日、聖母被昇天の祝日であつた。後十五年を経て、同じ聖フランシスコが我國に渡來し、鹿兒島に御上陸になつたのも、やはり八月十五日であつた。それから一五九九年になると、日本の司教ルイ・セルケイラは、聖母の御保護を求めるが爲に、「御守りの聖マリア」と云ふ祝日を立て、舊正月の初にその祝祭を行ふことに定めた。

斯様な次第で、我國には最初から聖母に對する信心が盛に行はれた、到る處に聖母マリアに獻げられた聖堂があり、ロザリオ會が設けられ、ロザリオと題する書籍すら發行された位である。迫害の暴風が捲き起つて、日本公教會は一時斷滅の不幸に陥つても、残れる信者等はイエズスとマリアの事だけは忘れな

いで、觀音の像を聖母マリアとして篤く尊敬したものである。ロザリオの玄義も知つて之を口誦むのであつた。コンタスは有たなかつた様だが、一連なり、二連なり、或は五六粒なりのコンタスの球を「コンタス様」と云つて、大切に保存し、膳の上に載せて恭しく推戴く。天使祝詞十遍毎に主禱文一度づゝを加へて、都合三十三遍になるやうに誦へるのを半座と云ひ、六十三遍になるやうに誦へるのを一座と稱する。平戸、生月島の信者間には「お札分け」と云ふのさへあつた。夫れは小さい板にロザリオの玄義を一つ宛書き付けたのが十五枚と、「朝御前様」と稱するのが一枚、都合十六枚あつて、毎月初の日曜日に組合の者が集つて、其板を入れた袋を一升楯の中に入れ、更に膳に載せて一同の前に出すと、一同は恭しく之を戴いた上で、袋に手を入れ、拇指に當つた札を取り出し、その書いてある玄義を讀んで膳に乗せると云ふ様にするのであつた。永久ロザリオ會の仕來を傳へたものかと思はれる。

(2) 斯の如く國內に残つて居る信者等は聖母マリアを忘れずして、始終之に信賴むのであつた。昔し救主御降誕の折に、東方から禮拜に來た博士等が、「家に入りて孩兒の其母マリアと共に居るを見た」(マテオ)が如く、彼等もイエズスと共に聖母マリアを見て居た。イエズスを禮拜むと共にまた聖母マリアをも尊敬んで居たのである。内は斯の通りであつたが、外からは何うかと云ふに、フォルカド師が日本の宣教師となり、一八四四年沖繩へ渡り、初めてミサを行はれたのは五月一日、聖母月の第一日で、其日に師は日本公教會を聖母マリアの最潔き聖心に獻げられた。その翌々年フォルカド師が司教に任ずると云ふ通知を得られたのも同じく五月一日、聖母月の第一日であつた。日佛條約が取換はされ、いよいよ宣教師が日本の土に足を踏み入れること出来るやうになつたのは一八五八年の十月九日、即ちロザリオの月で、しかもル、ドに於て聖母マリアがベルナデッタにお現はれになつた其年であつた。フォルカ

ド司教は後で病の爲に佛國へ歸り、ヌヴェル教區の司教となられた。其時ベルナデッタがヌヴェルの童貞院に入會したので、之が着衣式を執行ひ、誓願をも宣立せしめられたのは實にこのフォルカド司教で、ル、ド大聖堂の硝子窓には聖母の美しい御姿を書き、其側の方にフォルカド司教がベルナデッタに被布を被せて居られる所を描いてあるさうである。

後一八六五年、プチジャン師は長崎市大浦に天主堂を建て、之を日本二十六聖殉教者堂と名け、殉教者の元后にて在す聖母マリアの御像を安置し、其力ある御傳達によつて日本公教會が一日も早く復活の恵を蒙るやうにと、祈つて、祈つて始終祈つて居られた。

斯の如く内からも外からも、熱心に御保護を祈つて止まなかつたその子供等の聲をば、慈愛深き聖母が何うして御聞き容れ下さらぬ筈があらう。慶應元年三月十七日、浦上の信者等は大浦天主堂に參詣してプチジャン師に名告り出で、

直に「聖マリアの御像は何處？」と尋ねて、いよ／＼自分等は聖母マリアを尊敬する公教信者の後裔に相違ないことを打開けたのである。

翌年ブチジャン師は司教となられた。その司教の叙品式を受けられた日も十月の第三主日、聖母マリアの清淨の祝日で、司教は聖母マリアが日本公教會を特別に保護して下さると云ふことをしみ／＼と感じられ、最初から我身も我教會もこの慈愛深き聖母に献げ、司教の紋章には聖母が惡魔の頭を踏み付け給へる所を書き、信者發見の御恵を永久に忘れない爲め、ローマに請うて、三月十七日を以て「日本の聖母」の祝日と定め、終に慶應三年六月二日には、聖母無原罪の御やどりの御像を大浦天主堂の門前に据ゑ付け、盛に感謝祭を行はれた。

(3) —斯の如く聖母と我日本公教會との間には、淺からぬ關係があつて、聖母は何時にも渝らずこの教會を保護して下さつた。徳川幕府は久しくこの教會を迫害し、謂はゞ契約の櫃なる聖母をも捕獲して、之をダゴンの像前に据ゑ置いたかの如き觀もあつたが、明治維新と共に、彼の手足は振切られ、聖母は再び我等信者の手に回復され給ひ、明治六年以後はその聖母を自由に尊敬し、自由に讚美し、自由に愛慕することが出来る様になつた。その御保護によつて、今も我日本公教會は除々に發展進歩を遂げつゝあるのである。

されば日本公教信者たるものは、永く聖母の御恩を忘れず、聖母を識らず、尊ばず、敬はざる人々に代つて、いよ／＼熱く聖母を尊び、敬ひ、大に其御光榮を稱へ、その御權能を世に宣傳しなければならぬ。さうしてこそ大にしては日本公教會全般、小にしては我等一人づゝが、神の豊なる祝福を蒙るに至るのである。

(實例) —第十三回出現——三月一日ベルナデッタは、例によつて例の如く洞窟に眼を注ぎながら跪くと、姫君は微笑みつゝ御出現になつた。ベルナ

デツタはコンタスを取り出して額に押し戴き、十字架の印をしようとした時、姫君は急に表情を變へ、厳しい目付をして「あなたのコンタスは如何しました？」とお咎めになつた。ベルナデツタはその手にせるコンタスを示すと、「違ひます、それはあなたではありません」と曰うた。成るほど今朝或る婦人が自分のコンタスを聖母の御目にかけて戴きたい、永く貴重な、宗教的記念品にしたいからと云つて、之をベルナデツタに托けたのであつた。ベルナデツタは姫君に注意されて、はつと氣がつき、ポケットから自分のコンタスを取り出して之を示すと、姫君は軽く首肯された。

聖母は何故他のコンタスを用ひるのをお咎めになつたのであらうか。それは先づ我等自身のコンタスを大切にさせる爲であつたらうかと思はれる。

我等は父母が記念として遺した衣服や、祖先より傳はつた額面や、装身具やを大切に保存する、其等は自分の所持品と謂はんより、むしろ一個の神聖な家

寶である。今コンタスはそれ以上に神聖な寶物だ、聖會の祈禱を以て祝せられ、初聖體や堅振の日にも之を携へて居たではあるまいか。それから屢々之を爪繰つて聖母を讚美して居る。しかも聖會がこのコンタスを祝し、之に贈物を施したのは、私一人の爲であるから、その材料こそ安つばい、格別の價なきものであるにせよ、然し私の爲には貴重な寶物で、飽まで之を大切に保存せねばならぬ。

要するに昔の信者はコンタスを尊び、熱心に天使祝詞をくりかへし、契約の櫃にて在す聖母の御助を呼び求めたものである。その御蔭で、惡魔はその勢力を挫かれ、日本公教會は見事に復活した。我等も熱心にコンタスを誦へ、契約の櫃なる聖母を奉じて魔軍と戦ひ、その勢力を打挫いで、復起つ能はざるまでに至らしめねばならぬのである。

第二十一日 天の門 (其一)

(1) 聖母は契約の櫃に在して、其中に藏め給へる神の掟を以て、我等に救霊の道を教へ、その道を進んで行くが爲の糧としては、天のマンナたる御子をも與へ給うた。終には天の門となつて、我等の如き罪人をも易々と天國へ導き入れ給ふのである。

アダムの罪の結果として、人類は神に勘當され、天國の門までがピタリと締切られて了つた。其爲に舊約時代にあつては、如何ほど徳の高い、神の御心に適へる聖人でも、死後直に天國へは遣入れないで、一應は古聖所に下り、救世主の御降生を俟たなければならぬのであつた。随つて當時の人々は死ぬのを大變に厭がり、ユダ王エゼギアの如き信仰篤い人でも、「我は陰府の門に行くの

である。もう生ける人の住める地に於て、神を見奉ることは出来ないのだ」と痛嘆せる位であつた。然るに一たび聖母マリアが世に生れ給ふや、聽て世の始より埃ちに俟たれし救世主はこの清い聖母の御胎にやどりて人の肉體を受け、その肉體の上に有ゆる痛苦を堪へ忍び、十字架の上に死して以て人類の罪を贖ひ、神の御怒を宥め、その堅く閉されてあつた天國の門までも大きく推し開いて下さつた。もう天國の門は開かれた。罪さへなければ誰でも這入れることゝなつた。それよりして死に對する人々の考もガラリと變り、死んでも昔の人の如く寂しい陰府の門に行くのではなく、實はこの涙の谷を去りて、楽しい天の御國へ登るのだと思ふので、寧ろ喜んで死を迎へる様になつた。是れ固より救世主の御受難、御死去の功徳に由つて然るのではあるが、然しその救世主は聖母の御胎に人とならせ給うたのであるから、亦實に聖母の御陰にも由るのである。聖母が我等の爲に天の門となり給うたからでもあるのである。

(2) — なほ聖母を稱して天の門と申し奉るのには、聖母の御引立を蒙ると容易に天國へ辿り着くことが出来るからである。平生から聖母を深く愛し、聖母に對して愛子の心を抱き、燃ゆるが如き信心を持つて居るのは、夫れこそ救靈を得べく預定されて居る徴なので、早や天國の門に足を踏み掛けて居ると云つても可い様なものである。

して見ると天國に登るには、大に聖母を愛し奉らねばならぬ。たとひ夫でないにせよ、心ある人ならば、何うして聖母を愛せず居られるだらう。聖母は我等より愛されるのを待ち給はず、御自身から先きに我等を愛し給うた。聖母が親族エリザベトを御訪問になつた時の事を思つて見るが可い。エリザベトが懐胎して居ると聞かや、聖母は早速起ち上られた、行つて訪問しよう、手傳つて上げよう、その幸福を喜んでお祝ひ申さうと思ひ、遠い山路をも厭はず、エリザベトの宅を訪れ、エリザベトの挨拶を俟たずして、自分から先きに御言

を掛けられた。するとエリザベトは忽ち聖靈に感じ、聖母が神の御母に選ばれ給うたことを悟つた。胎内の兒までが溢れんばかりの聖寵を蒙り、喜悅に堪へずして躍り上つた。エリザベトはいよ／＼驚いて「汝は女の中にて祝せられたり、御胎内の御子も祝せられ給ふ、我何によつて我主の母の來臨を辱うしたるぞ」(一ノ四二)と叫んだ。

聖母は我等に對しても斯くなし給ふのである。自分から先きに我等を愛し、自分から先きに口を開いて我等の心に囁いて下さる。たゞ我等の方でもエリザベトの如く聖母に應へ奉らねばならぬ。御言に耳を傾け、その優しい慈母の御情、その我等に先じて下さつた御親切を感謝すると共に、我身の卑しいことを思つて、深く謙遜しなければならぬ。斯くせば、聖靈に感じて神に關する事を心から悟り、聖母の御恵をいよ／＼有難く感じ、爲に心は次第に清まり、行は改まつて、終には難なく天の門を踏み越えて、永久に躍り喜ぶことが出

来る様になるに相違あるまい。

(3) 一固よりエリザベトが聖靈に感じたのも、胎内のヨハネが溢れんばかりの聖寵を蒙つて躍り喜んだのも、是等の聖寵は聖母の御胎にやどり給へるイエズスに由るのであつて、直接に聖母から賜はつた譯ではない。聖寵の持主は神で、神は思召す人に御随意に聖寵を施すを得給ひ、又施し給ふこともある。

然しながら神は聖母を以て聖寵の源たるキリストを我等に與へ給うたのだから、亦聖母を以て各人にその聖寵を分配し給ふのは左も有りさうな事で、聖母の御傳達が聖寵を得るに必要缺くべからずと云ふ程ではないにしても、極めて有益にして、また安全な近道たることは疑を容れざる所である。「聖母を尊ばず、聖母より守護して戴かずして救はれることは、到底出来ないが、聖母に頼り頼り、聖母より愛される人で、滅びることも出来ないのである」と聖アンセルムスは曰はれた。是れとても聖母の御傳達が救靈に極めて有益だと云ふこと

を力づくよく斷言した迄に過ぎないのである。

兎に角、聖母は天の門である。この門に近き、この門の前を離れない様にさへして居れば、天國に入り損ふ氣遣ひはない。であるから我等は何時もく聖母の御前に跪き、之を讃め、之を尊び、之を敬ひ愛し、之が助を祈り、以て安穩に天國の門を潜ることが出来る様、務めなければならぬ。

(實例) 一第十四回出現——三月二日ベルナデッタは例の處に跪き、コンタスを取り出し、眼を洞窟に注いで祈り初めると、忽ちその額は異様に輝いた。然し出現が終つて、起ち上つた時、ベルナデッタは何となく沈み込んで、物思はしい様子である、附添つて来た叔母にその理由を問はれて、「再びペラマル神父様を訪れ、聖堂建築のことを申上げる様に姫君から命ぜられました、何うして彼の神父様の前に行つたものか、それを案じて居ます、ねえ、叔母様、私と一緒に神父様の所へ来て頂戴よ」と願つた。叔母もペラマル師の近き

難い威厳を畏れては居るが、姫君の命に背いてもならぬので、ベルナデッタと一緒に往くことにした。

果してペラマル師は言葉さへ荒々しく「何を知らせに来た？ 婦人が何を言つた？」と咎める様に尋ねた。

「今日も姫君の仰によつて参りました。姫君は聖堂を建てること、人が行列をして來ることを望むつて、神父様に傳へよ、と仰せられました」

とベルナデッタが答へると、司祭はいよ／＼不満の色を顯して云つた。

「何に？ 行列？ 夫れこそ無宗教家の冷笑を招き、我宗教の威信を傷けるのみだ、もしその姫君と云ふのが、果して聖母マリアならば、行列をする權利を有せぬ司祭に、そんなことを望み給はず、直ぐタルプの司教の許にお前をお遣しになるはずだ。

「……その婦人がお前の言ふ様な御方であるならば、それと認めるに足る

べき證據を示して戴きたい。その婦人に言ひなさい、見物人の面前で突然、

洞窟の野薔薇に花を咲かして下さいつて、もしその奇蹟が行はれたら、私も

お前の言ふことを果すと約束して置く」

と曰つた。ベルナデッタは首肯いて、微笑みながら暇を告げて立去つた。

聖母は天の門に在して、成るべく多くの人をその天國に導き入れたいと欲し給ひ、ベルナデッタに幾回となく顯れ、終に聖堂の建築と行列とをお求めになつたのである。無論天國に登るには、内心を第一とするのだけれども、然し聖堂に集り、公に行列をなし、聲を揃へて聖歌を歌ひ、祈禱を誦へるのは、心に漲れる感情を外に發表すか、或は冷え切つて居る感情を再び燃立せるのに與つて力あるもので、さうしてこそ人は次第に惰眠を醒まし、相携へ、相助けて天國の道を辿るに至るものである。